



日蓮上人注畫讚

寛永版

全

1027



特
八波 4
1.024
卷

日蓮聖人註畫讚序

沙門日澄

錄

釋日蓮法將者不怖刀杖之重障不憚謫戮
之巨難著忍辱之堅甲於慈悲膺揮妙法之
利劍於信力手摧破執權之軍陳切斷謗實
之魔賊猶恨重崇法王之鳳銜罕輕蔑佛使
之龍泉鬱雖然八教之堅陳稍敗方便之勁
軍三類之強敵漸挫怨嫉之銛鋒因茲降
侶信仗頭服者合隨從掌於是權實之法令

卷十五



明順逆之賞罰信且見存亡機圖安危世預
勘將來現得符合寔旃死身弘法之烈將破
權門理之導師呵責謗法之銳士兼知未萌
之聖人緇田之秀穗法林之翹楚也邪智雖
騁百非而非所毀奇辯雖飛萬是而非所譽
絕倫高德巨得而稱焉予謹註前書兼畫後
素略讚玄德号曰註畫讚三十二篇篇次序
年月而繫言分爲五卷千古難備芟煩撻華
留贈後昆望垂添削云爾

目錄

- | | |
|----------|----------|
| 誕生第一 | 登山出家第二 |
| 遊學第三 | 建立宗旨第四 |
| 造安國論第五 | 諸宗夜討第六 |
| 伊東左遷第七 | 立像釋迦第八 |
| 文永彗星第九 | 慈母蘇活第十 |
| 東條被疵難第十一 | 蒙古牒狀第十二 |
| 十一通回狀第十三 | 祈雨勝負第十四 |
| 行敏狀第十五 | 龍口頭座難第十六 |

赴依智第十七

樓中遣狀第十八

佐渡流刑第十九

諸宗問答第二十

重連追來第二十一

印性房第二十二

尼問第二十三

前司狀第二十四

赦免狀第二十五

重謁頼綱第二十六

入身延山第二十七

蒙古來第二十八

龍象房第二十九

附蒙占來

示寂第三十

收取遺骨第三十一

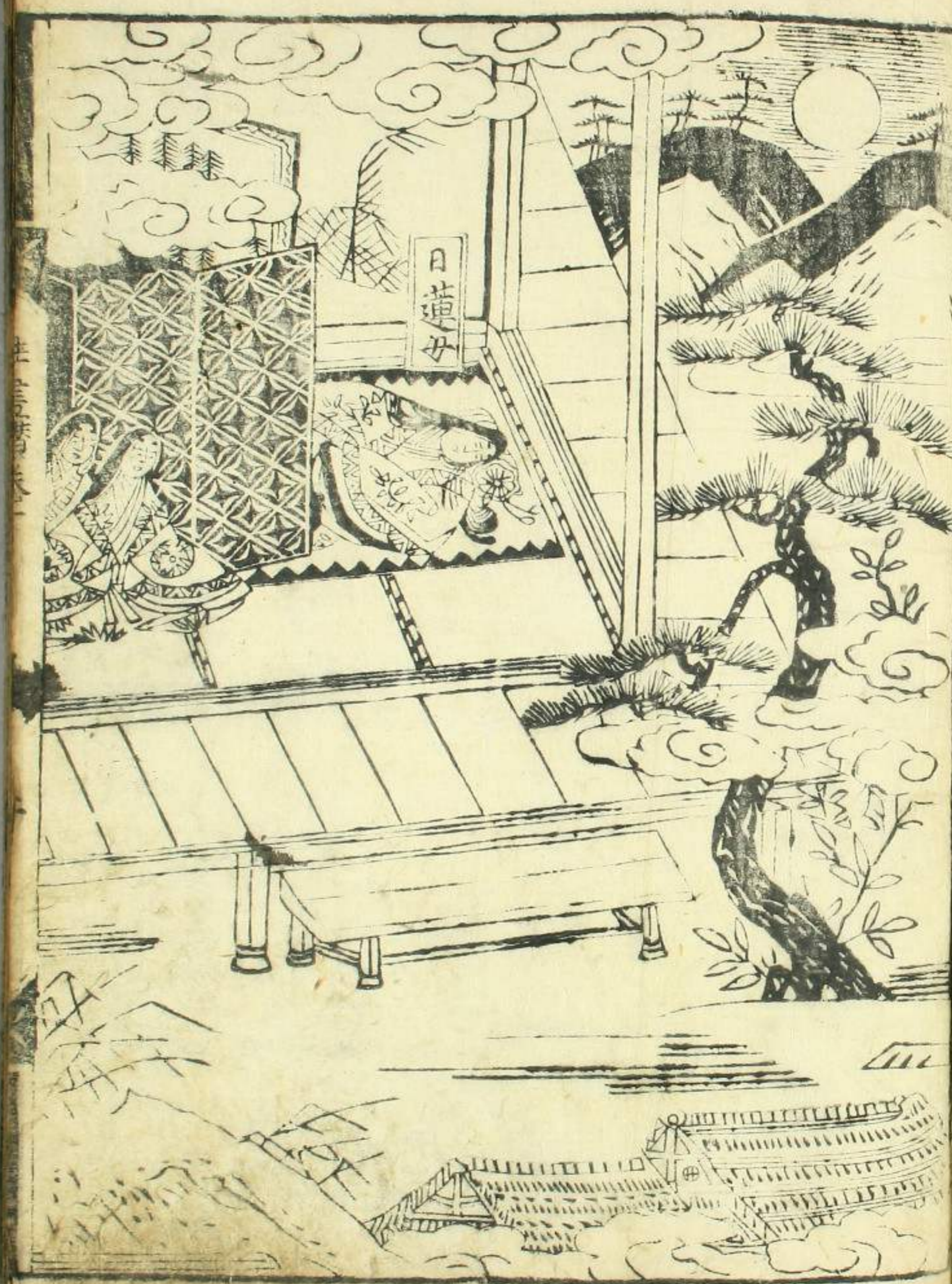
御書目録第三十二

日蓮大聖人註書讚卷第一

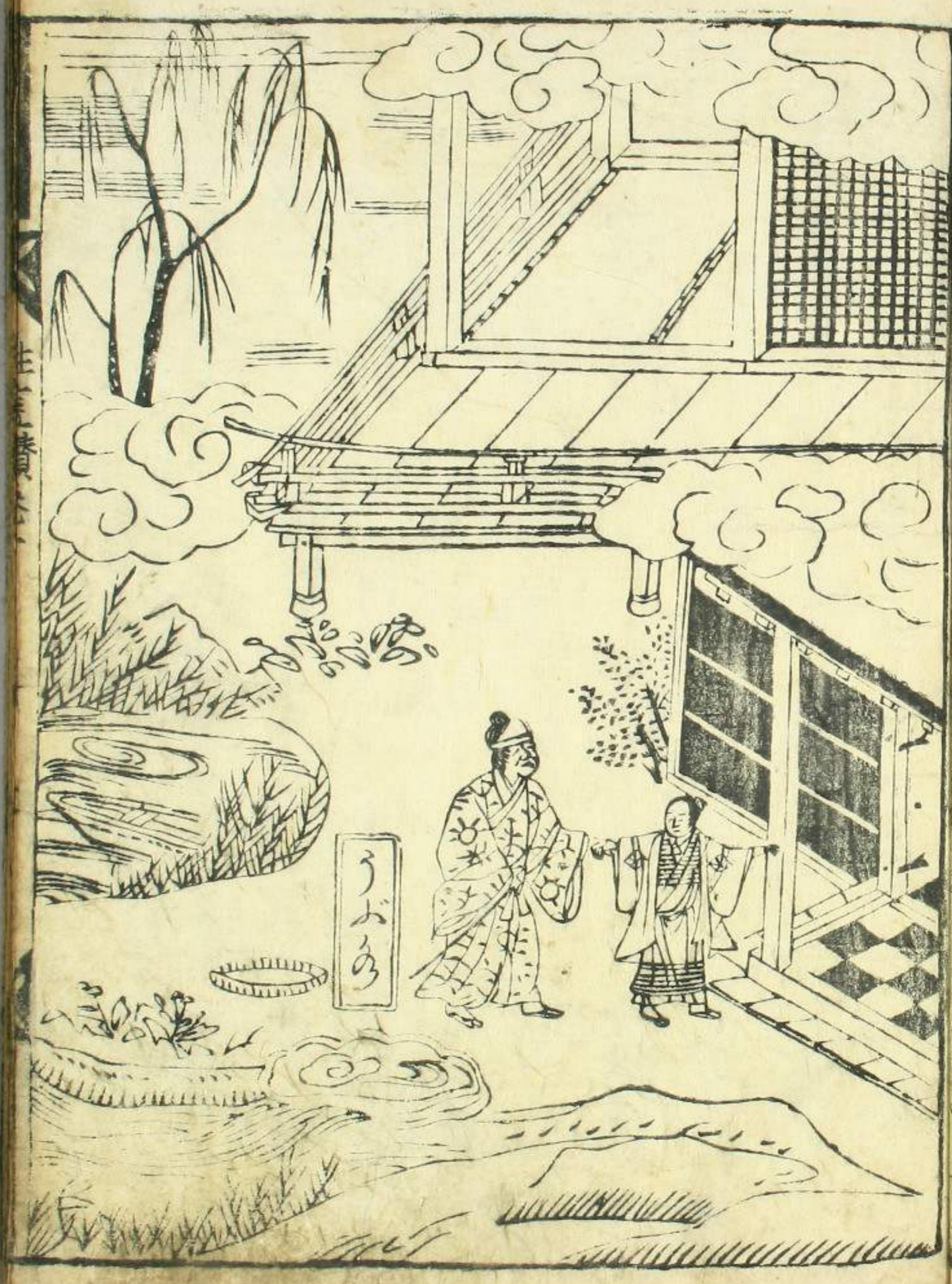


御誕生第一

蓮師の姓や三國氏父や遠江国の主貫名の
 重寶の志るし。重忠なり。日蓮や第四子。聖武
 皇帝の御のそし。父や遠別。母や安房国長狭
 の郡東條の郷のぐら。市河の村小湊の浦。
 つかれて。さよ。母や清原氏なり。
 朝日を祈し。日天。ひの。とて。
 夢。つる。結。て。は。く。知。り。し。て。う。八。十。六。代。の
 後堀川院の時。貞應元年。み。の。の。



びま 二月十六日のびまのこくごうまのれあつる
 迦^{あつる}如来^{あつる}の湯入^{あつる}滅^{あつる}よりまこのこくごうまのれあつる
 ろくろ如来^{あつる}や二月十五日も孫^{あつる}あしし日蓮
 や二月十六日くまのれあつるのれあつるのれ
 あつるのれあつるのれあつるのれあつるのれ
 いのれあつるのれあつるのれあつるのれあつるのれ
 う^{あつる}湯^{あつる}の^{あつる}水^{あつる}の^{あつる}り^{あつる}る^{あつる}り



登山出家第二

八十七代。室条の院の時。時夫福元年。三つばの

こ。五月十二日。十二と。い。く。おる。よ。さ。國のこ

か。清澄山。の。よ。のか。道善房を志し。やう

と。藥王丸。と。う。も。お。い。ま。み。や。延應元

年。は。ら。の。と。れ。い。十月八日。う。の。あ。く。に。十八と。い。う

し。く。の。を。う。の。沸。り。も。や。と。う。の。日。蓮。と。あ。う

た。め。の。ゆ。も。ぬ。ら。を。虚空。截。し。い。れ。り。あ。う

三七日。う。六十。あ。ま。り。入。老僧。右。の。手。は。あ。う

の。こ。く。乃。寶珠。を。り。ら。さ。は。は。き。の。ゆ。と。夢。う。う

つ。く。これ。ま。の。り。と。ま。ら。く。十。と。あ。と。ま

る。あ。う。ひ。や。が。尊。の。ま。う。の。ら。あ。う。あ。う。と

を。さ。し。ち。う。あ。あ。と。あ。う。ひ。さ。う。な。あ

あ。う。う。び。わ。と。あ。う。た。の。た。り。と。う。い。と。こ

夢。う。う。ま。う。う



學問第三

其後、のりしあつて、おとせ千里
 小るひ、おそこと、をみ、まつ、のりし
 浄土宗をかくも、能化と大阿弥陀佛と
 大阿弥陀佛、おし、よき、らし
 血を、し、も、十、生、た、ゆ、
 北嶺園城寺、
 諸宗を、ひ、り

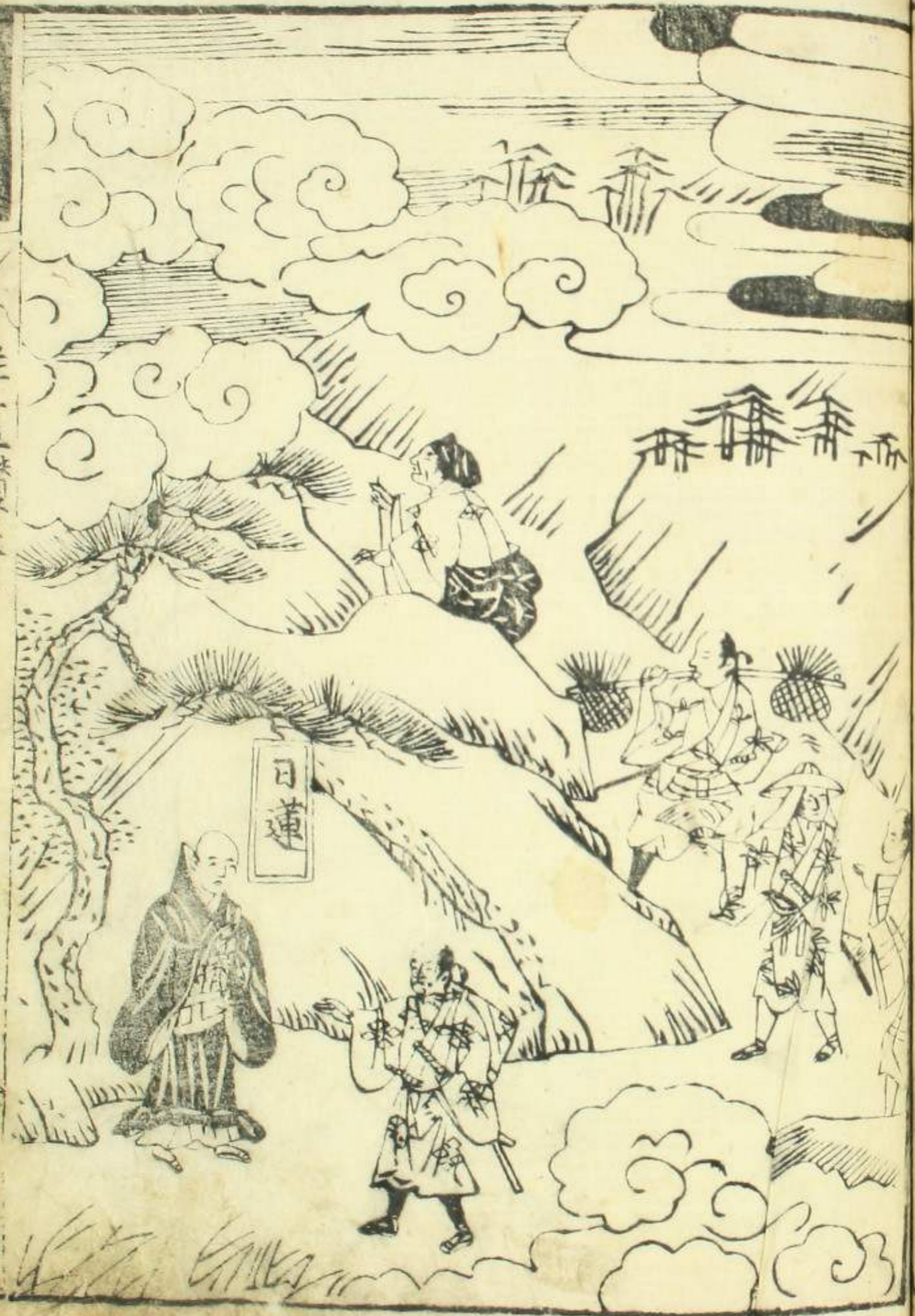


法華經卷之二



法華經卷之二



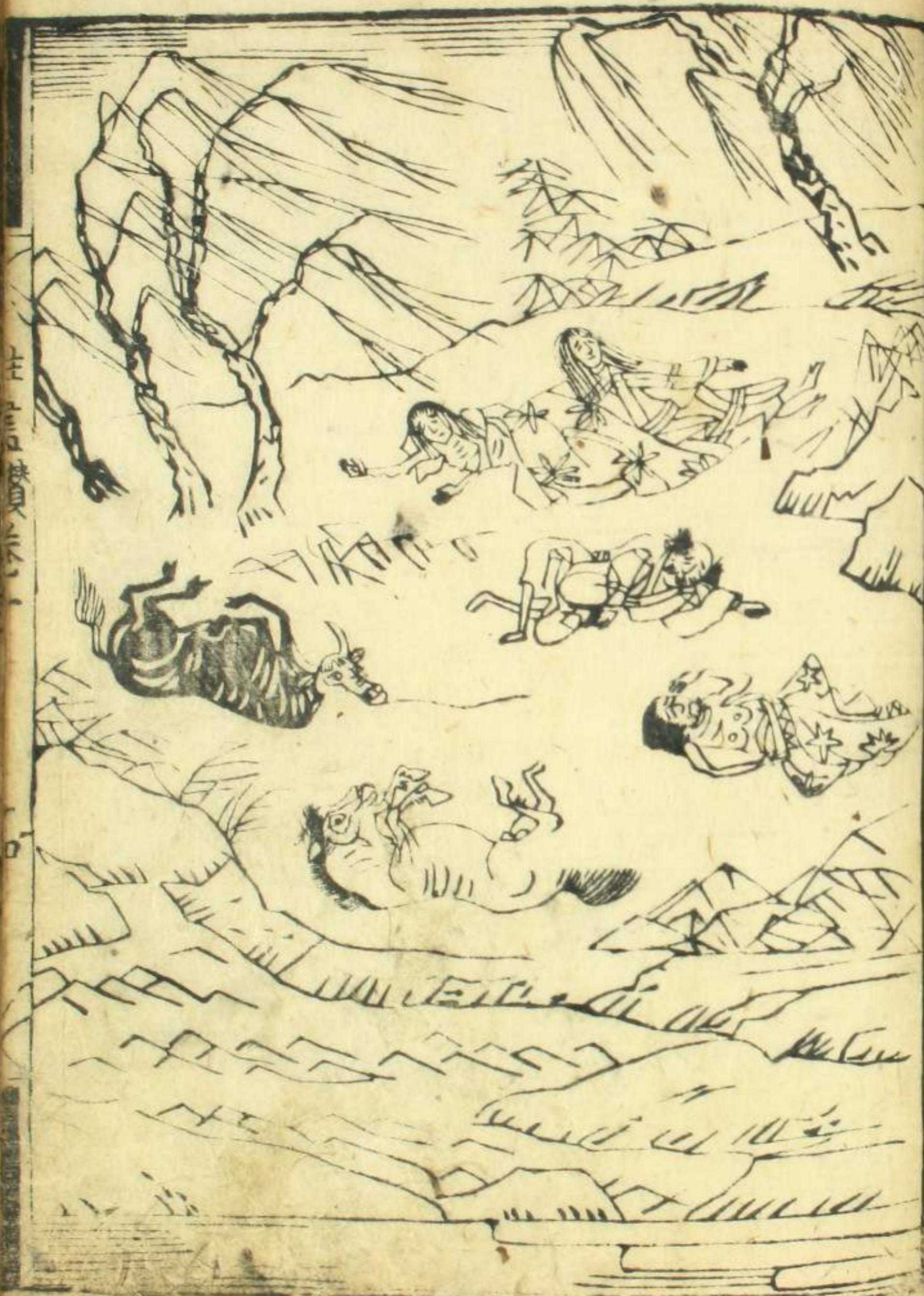


註書續卷一

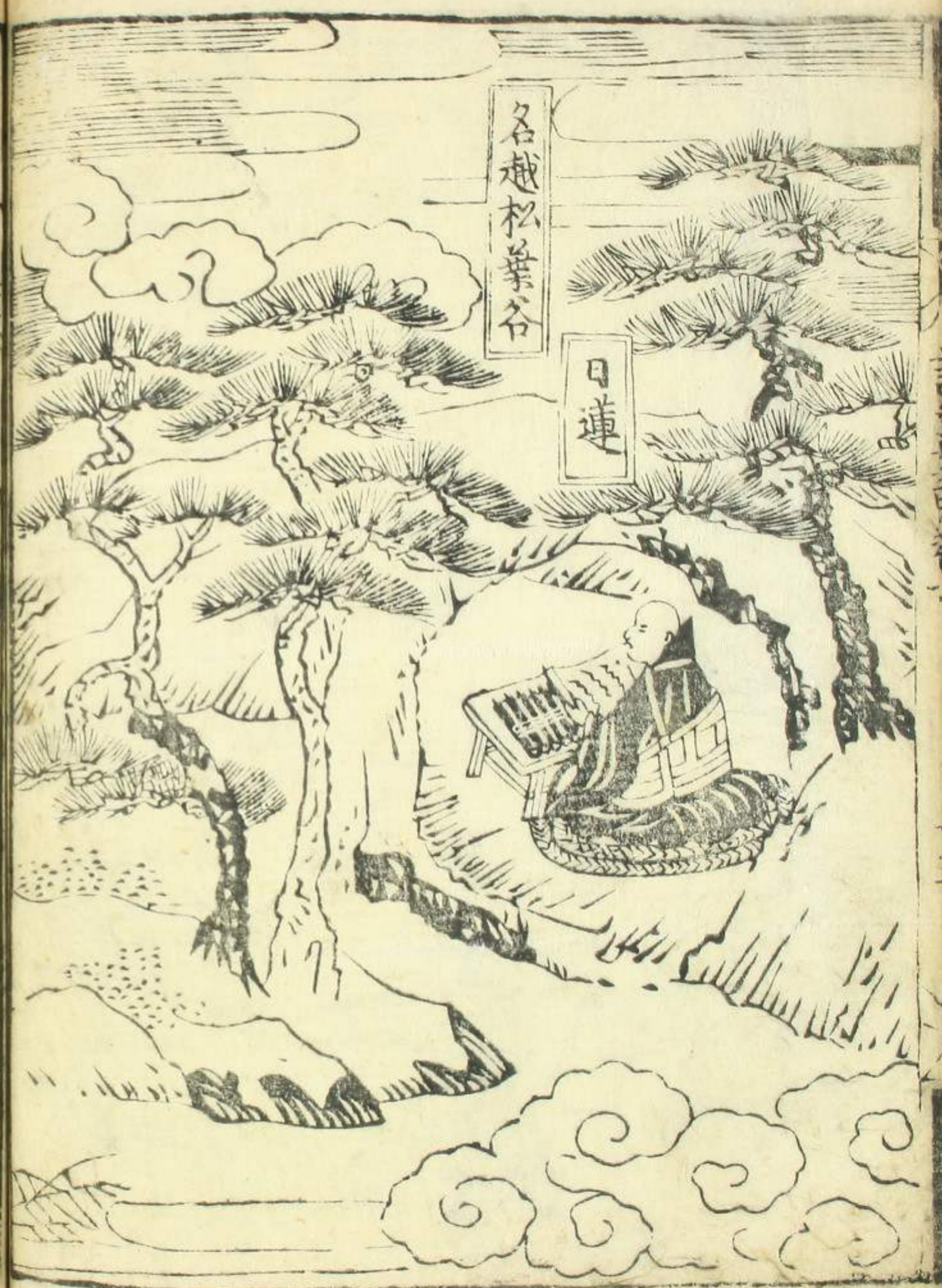
佛者がうをやうらむひのふもの。のひらりて
 のらひゆりもちたち一門のりあらわるる。注たりて
 一さめしまぬふづ。三び度た下さらぬのふ
 一ふらり

註書續卷一

廿二



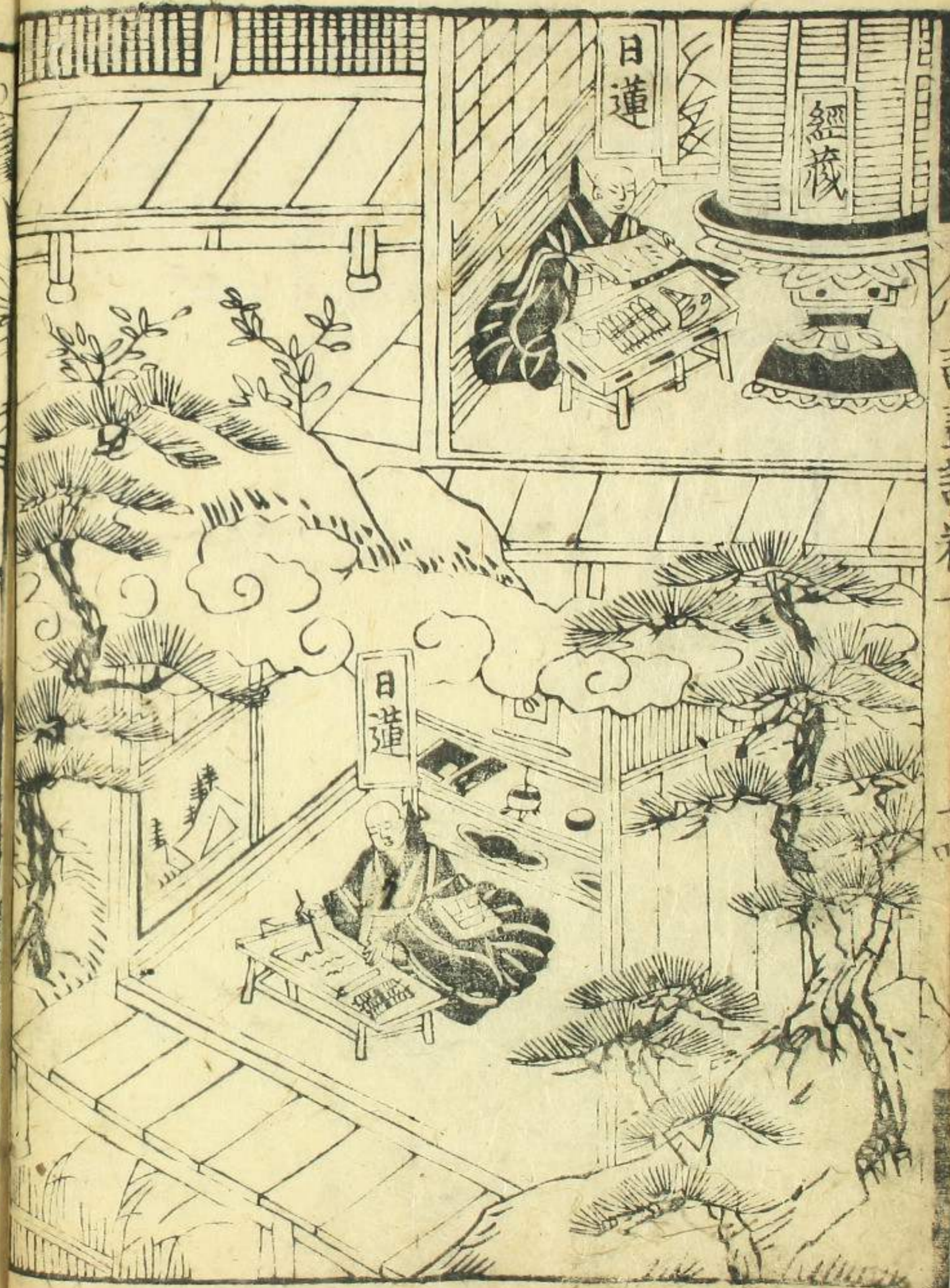
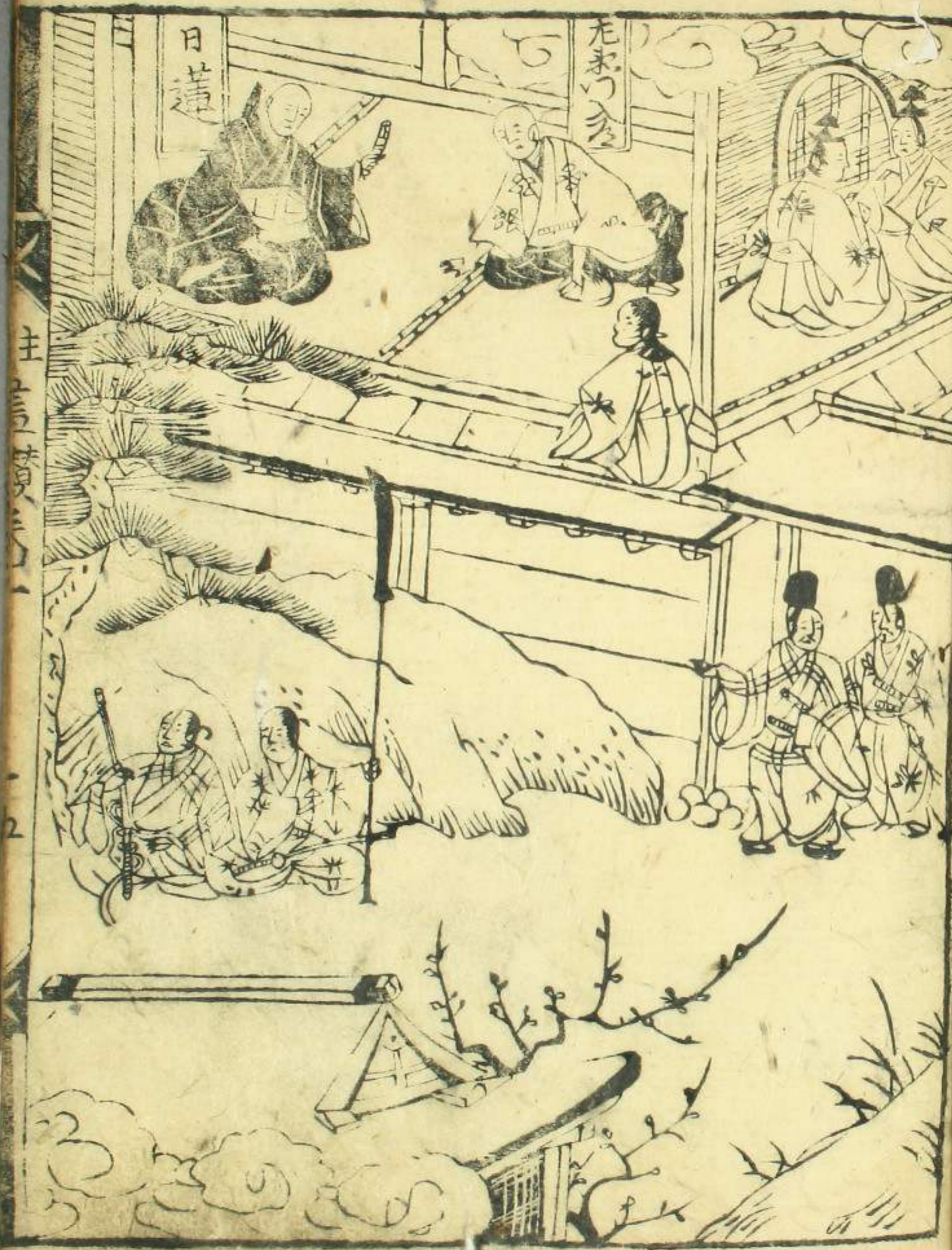
名山記卷之十一

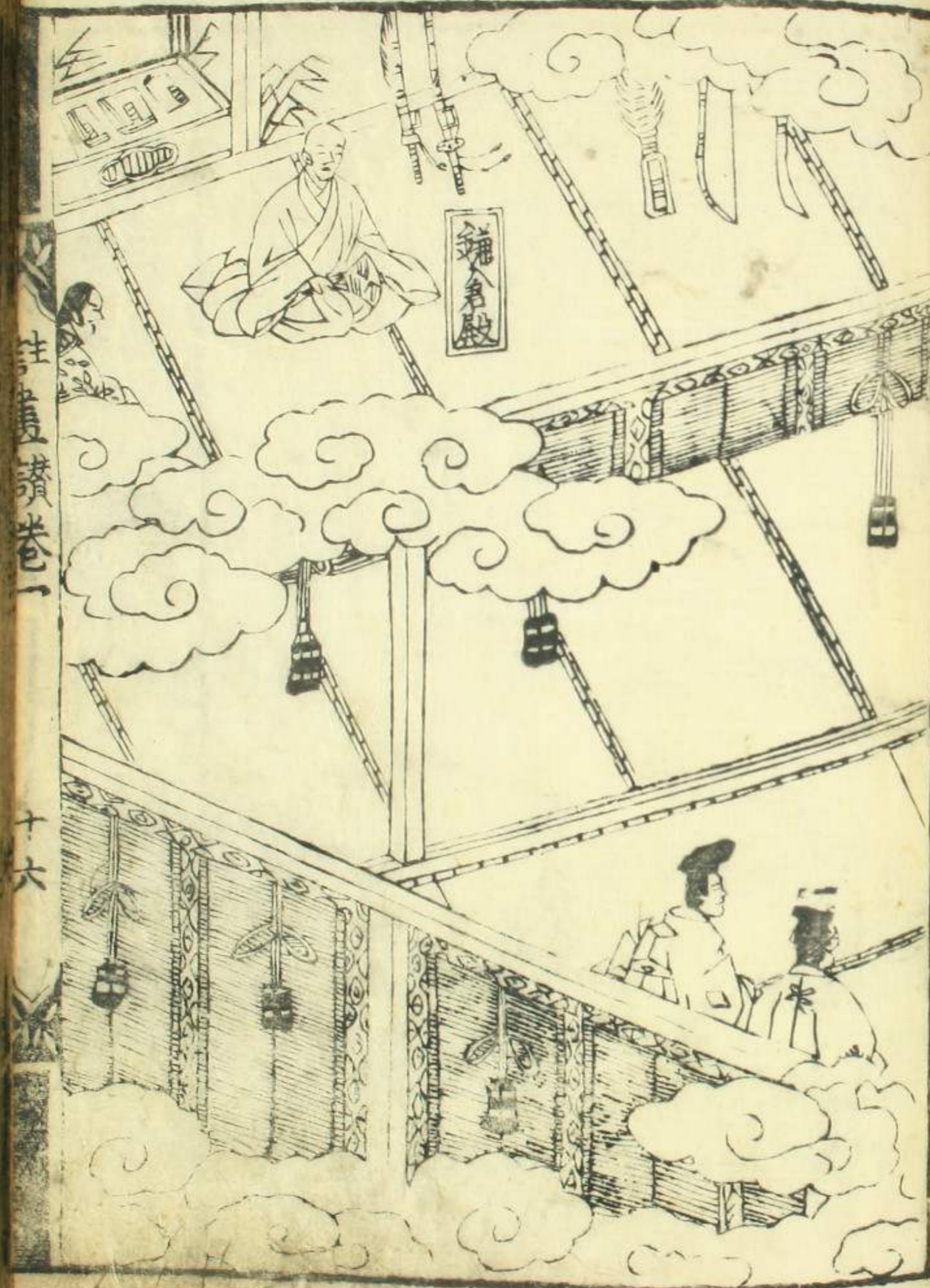


名越松葉谷

日蓮

名山記卷之十一





註
續
卷一

十六

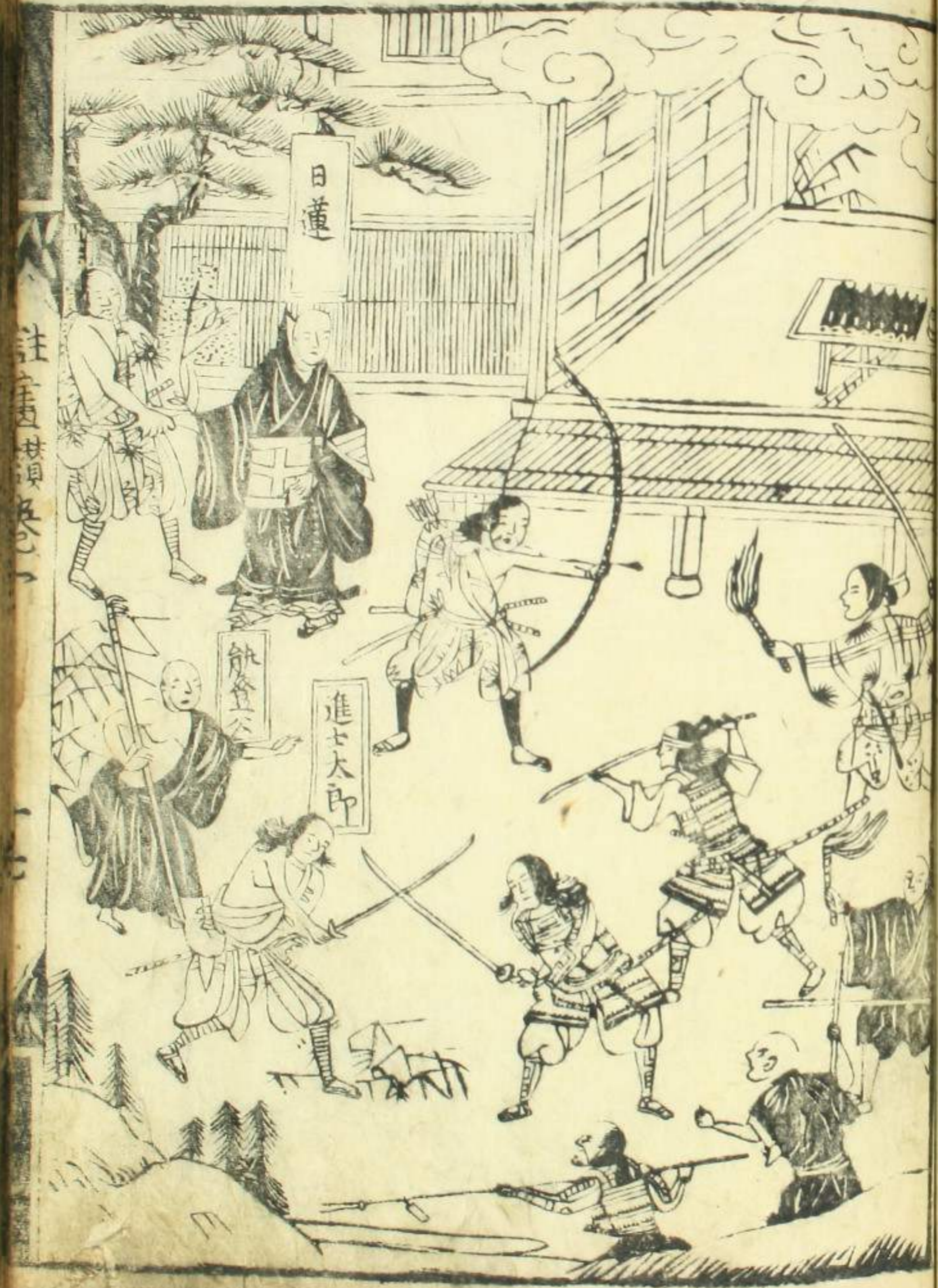


註
續
卷一

十五

諸宗夜討第六

其後日数をとるべく諸宗數百人草菴へを
 まゝつゝて夜くらよせしとひ日蓮おんせいの中
 ををり。そ夜乃ぐいのをのり連綿ふ。弟子能登
 る。たしおき進士の太島とけいめとくま
 とくまのふおかり。建長五年のこのころ天
 下をいさめぬよゆい。やうのあしきつらなり



注 進士太師

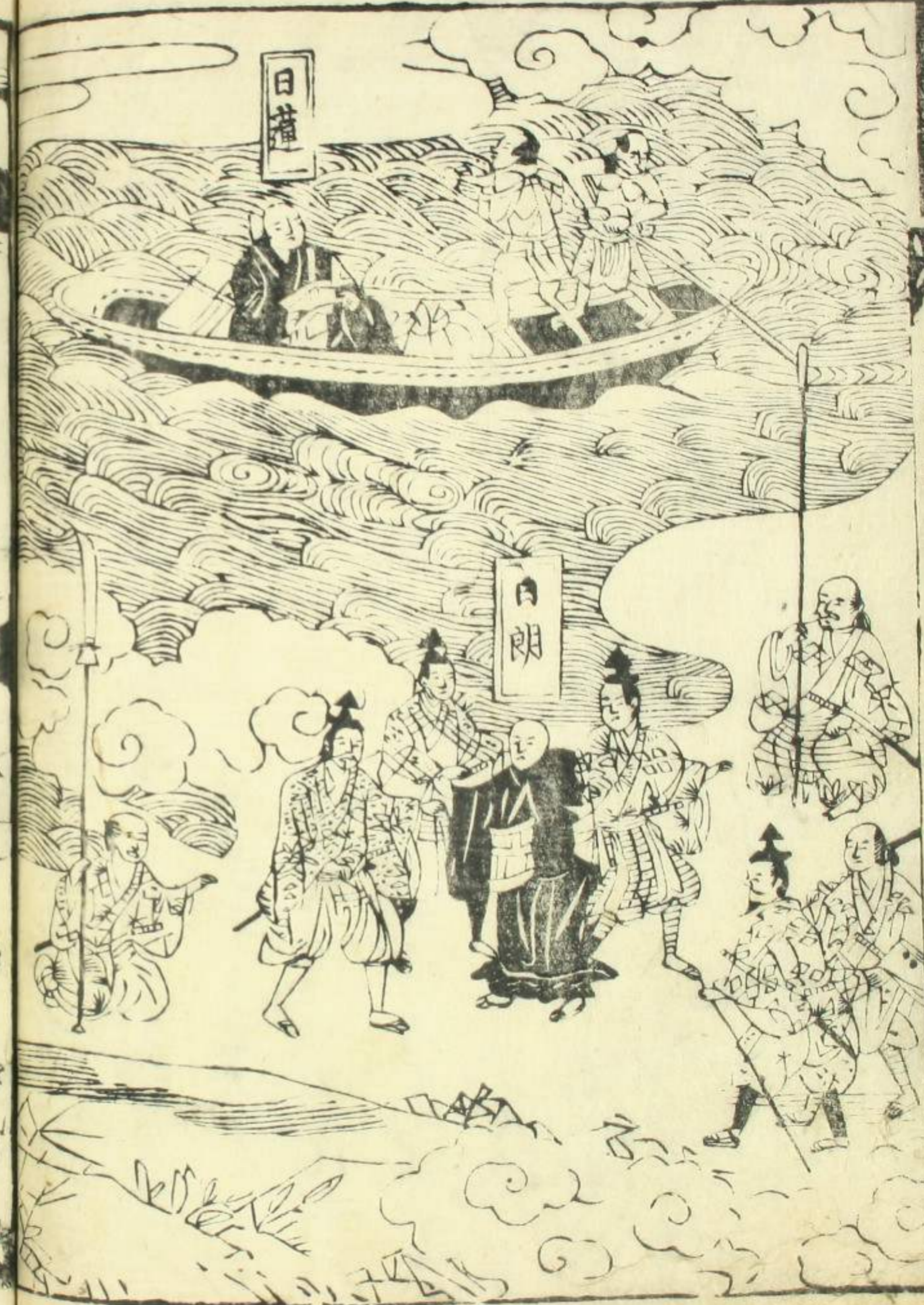
伊東左遷第七

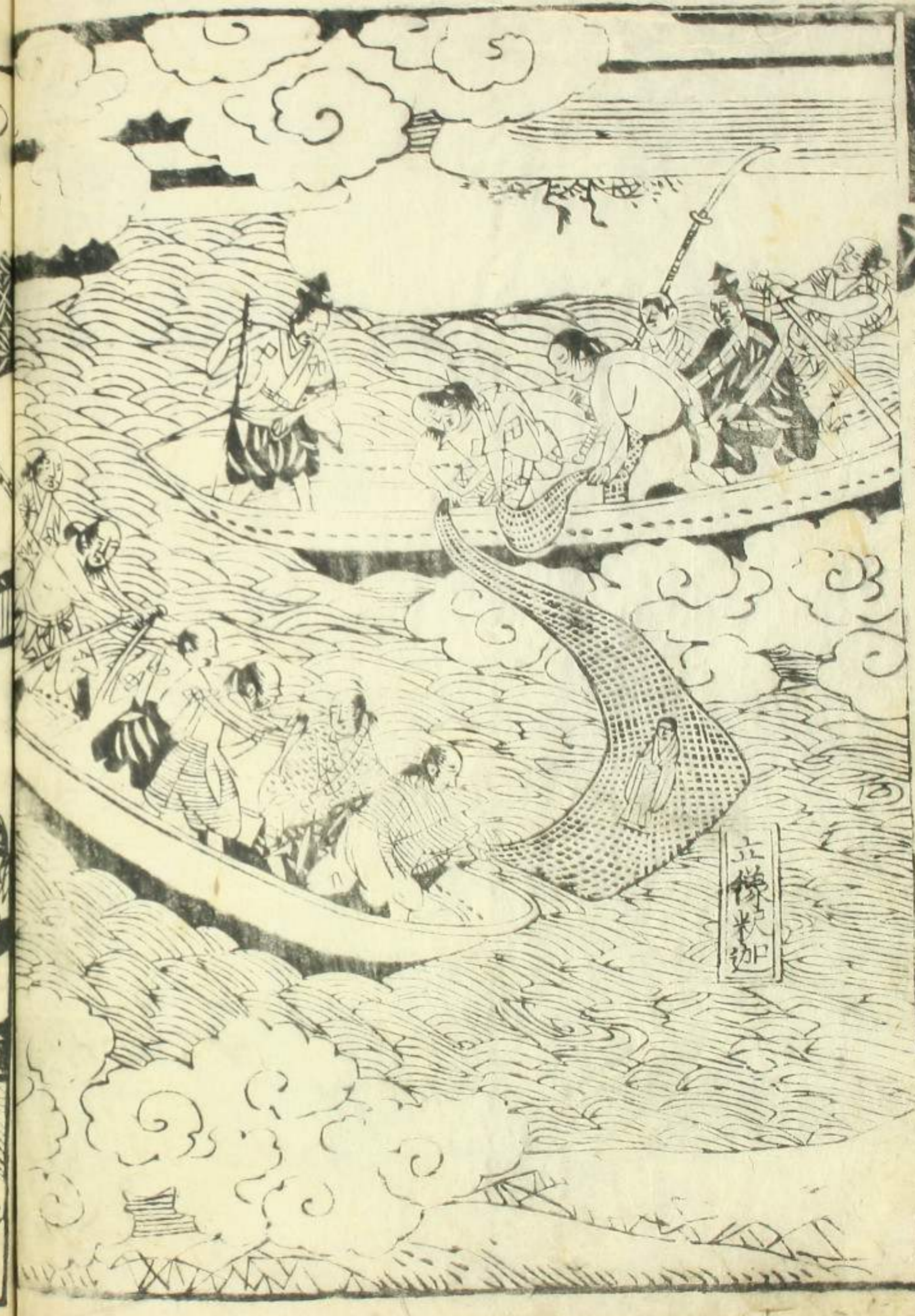
弘長元年辛酉五月十二日。山崎より四十入河
伊豆国伊東のうへへおつされぬ。のりゆく
の弟子や。これくわひもさる。日朗一人志
たひひあつて。證空法師といひ。のりゆ
井寺の智興法師。つりつ。智興やまひあり
くも。もさる。安部晴明。はゆのいぬを
か。く。い。は。ゆ。の。ま。ひ。を。は。つ。る。し。
善命。の。り。ゆ。の。あ。い。は。い。ぬ。を。は。つ。る。し。
証空。の。り。ゆ。の。あ。い。は。い。ぬ。を。は。つ。る。し。

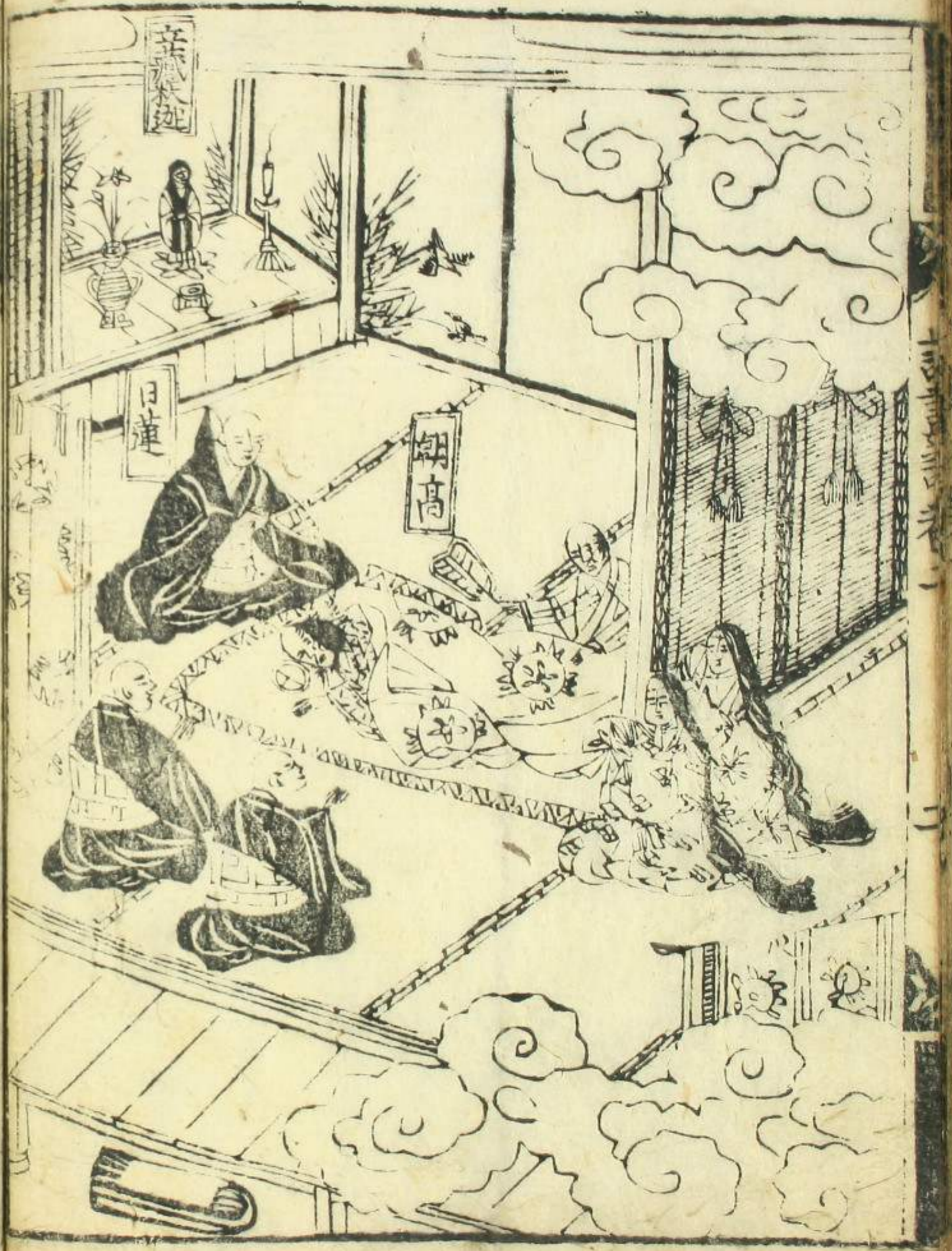
一人すゝもりて。がうれたる。命もさる。事や。ゆり
ら。ま。し。わ。と。安茂。の。ひ。ひ。も。安茂。の。あ。り。ん
屋敷。の。智興。の。ま。ひ。を。は。つ。る。し。証空
も。あ。い。は。い。ぬ。を。は。つ。る。し。日朗
も。あ。い。は。い。ぬ。を。は。つ。る。し。官使。の。あ。い。は。い
て。い。は。い。ぬ。を。は。つ。る。し。舟。を。出。時。日朗。を。つ
ら。つ。日朗。の。鎌倉。由井。の。濱。入。大。菟。の。や。と
つ。ら。も。さ。る。の。あ。い。は。い。ぬ。を。は。つ。る。し。長保。の。あ
い。は。い。ぬ。を。は。つ。る。し。寂照。の。あ。い。は。い。ぬ。を。は。つ。る。し。

なるをわし。寂照母をなぐさめし。月
 西の山へ入るとんぞ。大唐も子あり。思ひ日東の
 山も出るとんぞ。和國へ母あり。思ひ
 いひ。月の入るとんぞ。師日蓮伊東
 と思へ。日の出るをみ。日朝このし。か
 ちりと思へ。ひよ袖を。かきか
 袂と。由井の濱。ひよ。かきか
 きの。宿の。舟守の。かきか
 三多。舟。かきか
 夫婦。かきか

日あり。法華經を。二十余
 たり。ちあ。伊東へ。伊東の八島虎門。
 伊東へ。伊東へ。伊東の八島虎門。
 尉朝高。彼ら。かきか
 や。かきか
 松入。かきか
 いか。かきか
 なる。かきか







文永彗星第九

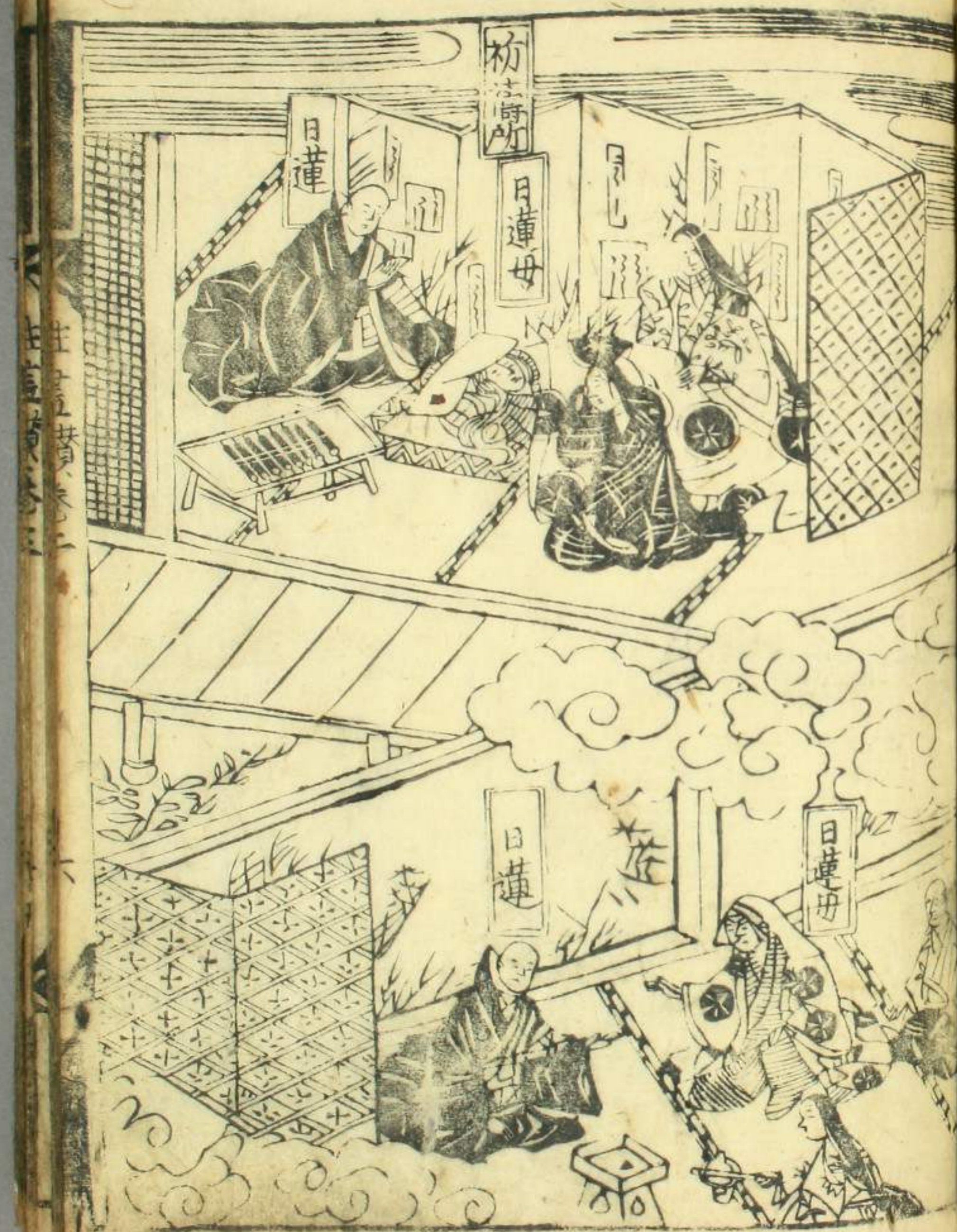
文永元年甲子七月五日。大せつく出来つと。
 正嘉の大地震。文永の年。くさやけの事
 をいふ。日蓮の閻浮第一の法華經の行者として。
 諸宗の大小の根源を明のふ。然と国の主も
 民も。有智無智とともあつて。天の災をのつて。
 諸天を此行者をあふりて。天の災をのつて。
 地を裂く。密軍地神は彼悉敵をいひく。
 地の禍をのつて。あやしく。閻浮第一
 一の瑞相爰におらる。天下の災難。年々おこつと。

世間の衰令。後深まき。蒙言。教方
 の兵船。とうへて。日本國とせめ。上王位。下民
 におまき。閻浮第一の大難。遇へし。日蓮曰。此天
 地乃二川の災難。外典三千余卷。と載られ。或
 一尺二尺一丈二丈五丈六丈の星。外典
 にも明も。然る内傳七千餘卷。をのつて。是を
 勘る。よ。大なる。大唐天竺日本の内。を
 未ん。今此趣を勘て。立正安國論を
 作て。最明寺入道殿。奉つ。其状。此瑞
 相。他國。此國。の好む。し。



慈母蘇活第十

此年の秋山と四十三年一ておぼしめての
 のすこのまのいふ父のあまのふまの母の
 うがをれがこまのいふとさり七十ありは老
 母たまありあつていふとさり七十ありは老
 頓^いづらうづらひ死^しつ日蓮^にうりこいふとさり
 ちひつる我ひろひつ法華經日本國^に流^る
 布^ふきまへく母の命^{いのち}を助^{たす}けへと華^{はな}とおつ水
 をむすひ法華經とよこのいふとさり
 よこのいふと命^{いのち}と近^{ちか}縁^{えん}る四年^{しねん}が
 一ていふと事^{こと}を





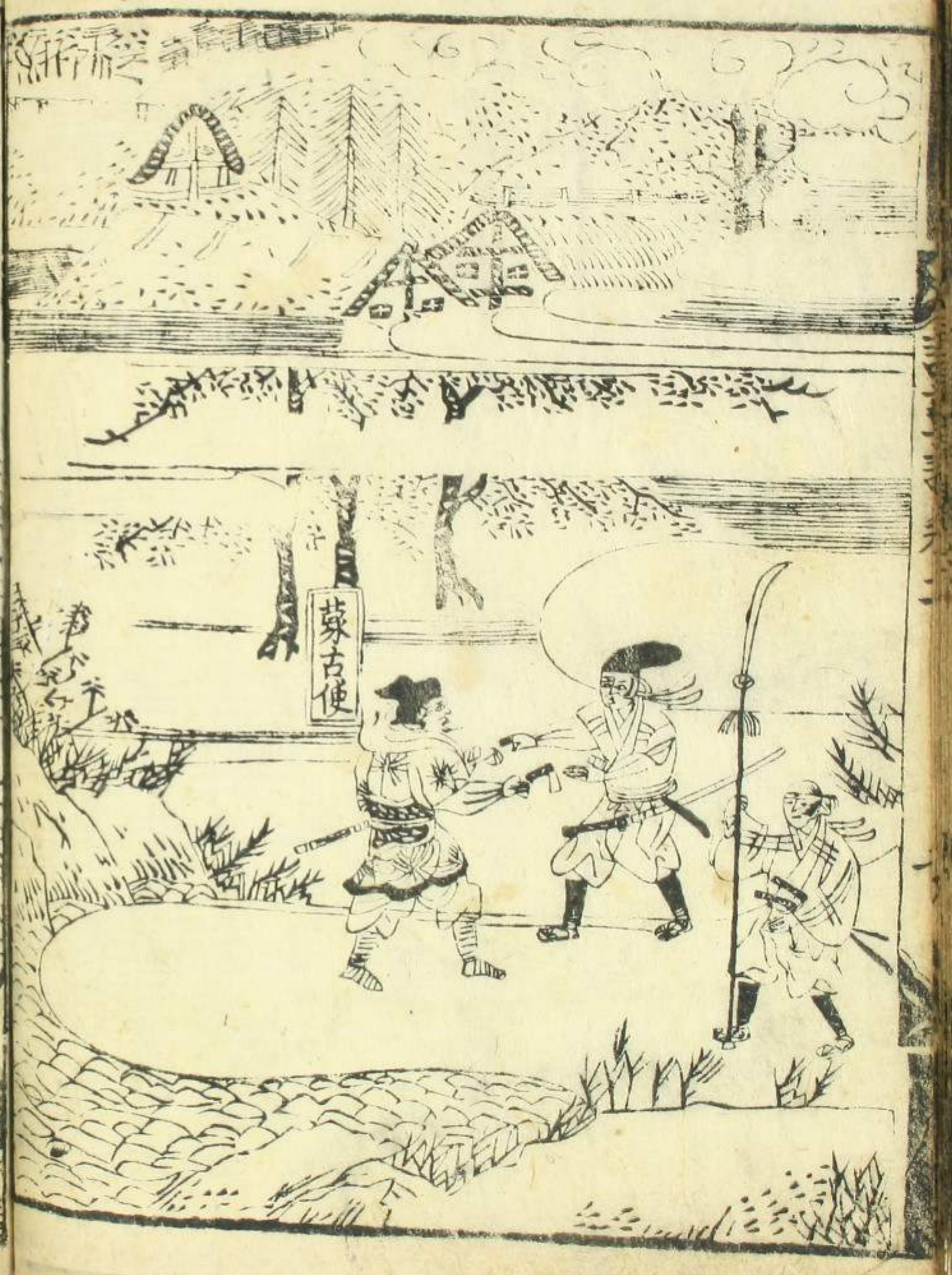
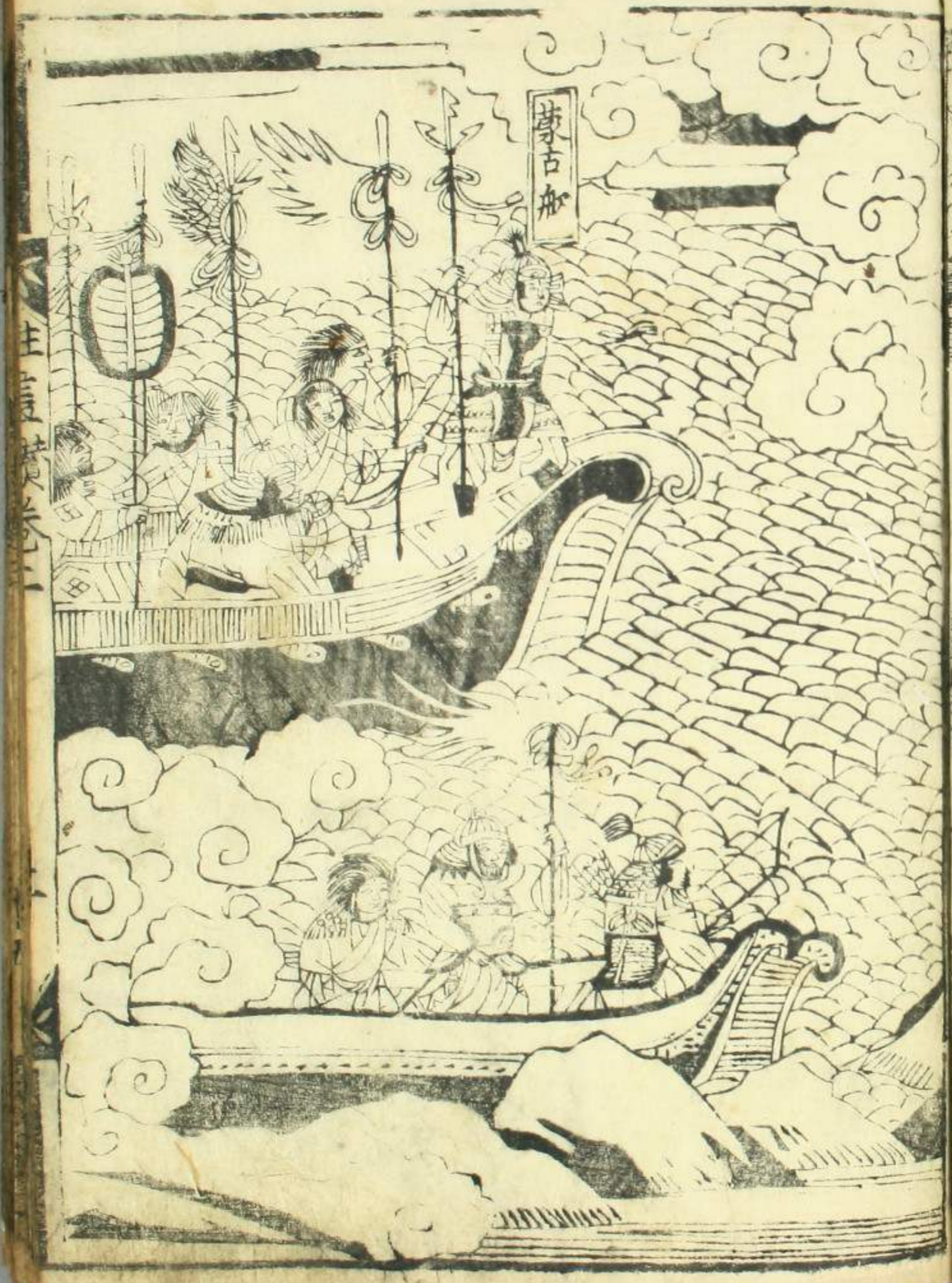
をうらりまらと日蓮をいしむるまにまに天津乃
 村をくまゆ症とあくろひ鎌倉へをくら
 なる景信や十羅刹女のせうとけ七日の内
 忽ち死をり





蒙古狀第十二

人皇九十九代龜山院文永五年戊辰潤正月十八
 日大蒙古國より日本国攻をうへまよりの
 の様状来る。蒙古右のつらひ。毎夜はくくの地を
 つらひ。舟の津軍入場くうくうと是をうへし。
 人のまことくくと相し。所の案内とみくゆりぬ



十一通狀第十三

文應九年八月廿五日。宿谷入道やじやのまゝのつ
 のみ狀より。經文の。彼国より。
 此国とせのし事。必ひつが定るり日本国中。日蓮
 一人調伏てうふくす。さきまや。て是を。是と勤
 ろ。君の。神佛のため。し
 かいせうを。又同年の十月。十一通
 之狀より。所十一也。鎌倉殿。宿谷
 の入道。平左衛門。弥源太入道。建長寺の道隆。
 極樂寺の良觀。大佛殿の別當。壽福寺。淨

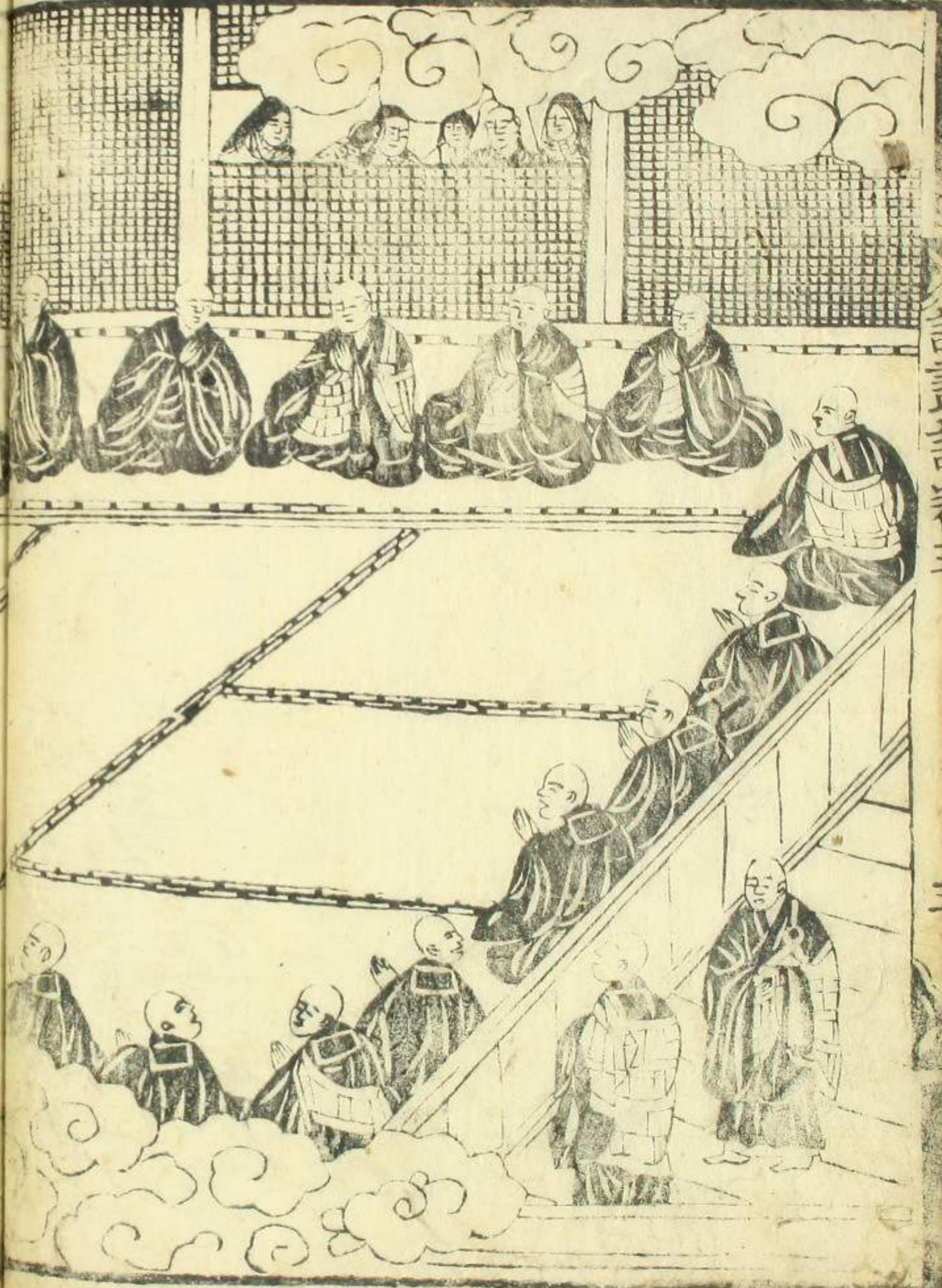
光明寺。多宝寺。長樂寺也。弥源太の
 のみ狀より。法華經を。のハ三
 りろくの佛乃大を。天照八幡大
 菩薩。此国とせの。大方蒙。國
 里狀しやう事。今。後を。の
 他國の奴やつと。良觀。の
 狀の畧。日蓮。日本第一。法華經
 の行者也。蒙。國對治の大將。餘を畧す。
 あるひも。伎を。の
 も。ひハ。の。ひハ。

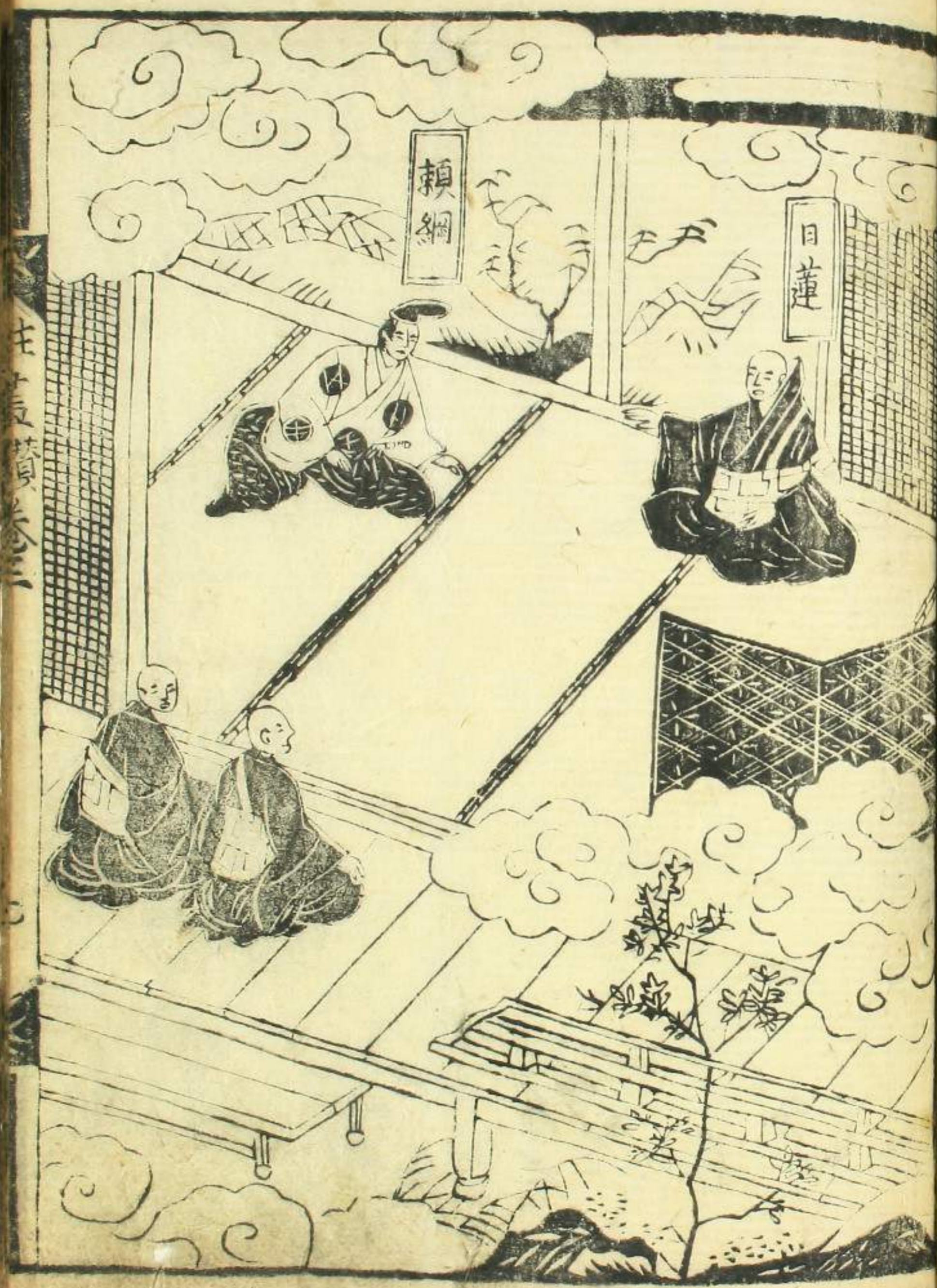
あまのこころひろくも。其時聖人乃才子且那
る。流罪是一定る。アしがもぞろくも。なり
ま。日蓮こそす。取をのく用心あつ。少し
妻子眷属を。せ。くる。や。れ。此。び。生死乃
ま。つ。る。を。物。く。佛果。と。け。終。つ。し。あ。ひ。や。う
ぢ。や。う。に。い。ふ。く。う。へ。と。ま。わ。く。を。あ。つ。く。う。を。
ひ。と。ら。ふ。へ。く。う。才子。た。し。る。お。乃。所。領。あ。く。ん
この。と。し。是。と。ら。あ。け。ろ。り。よ。あ。く。し。の。の。を。し。
せ。つ。の。う。へ。く。ひ。と。ら。あ。く。く。う。を。あ。つ。く。う。を。し。

東夷の合戦三年の事。日蓮上人の状来る日蓮上人の神通の事。此書を佛のみらひし事。末代の人。

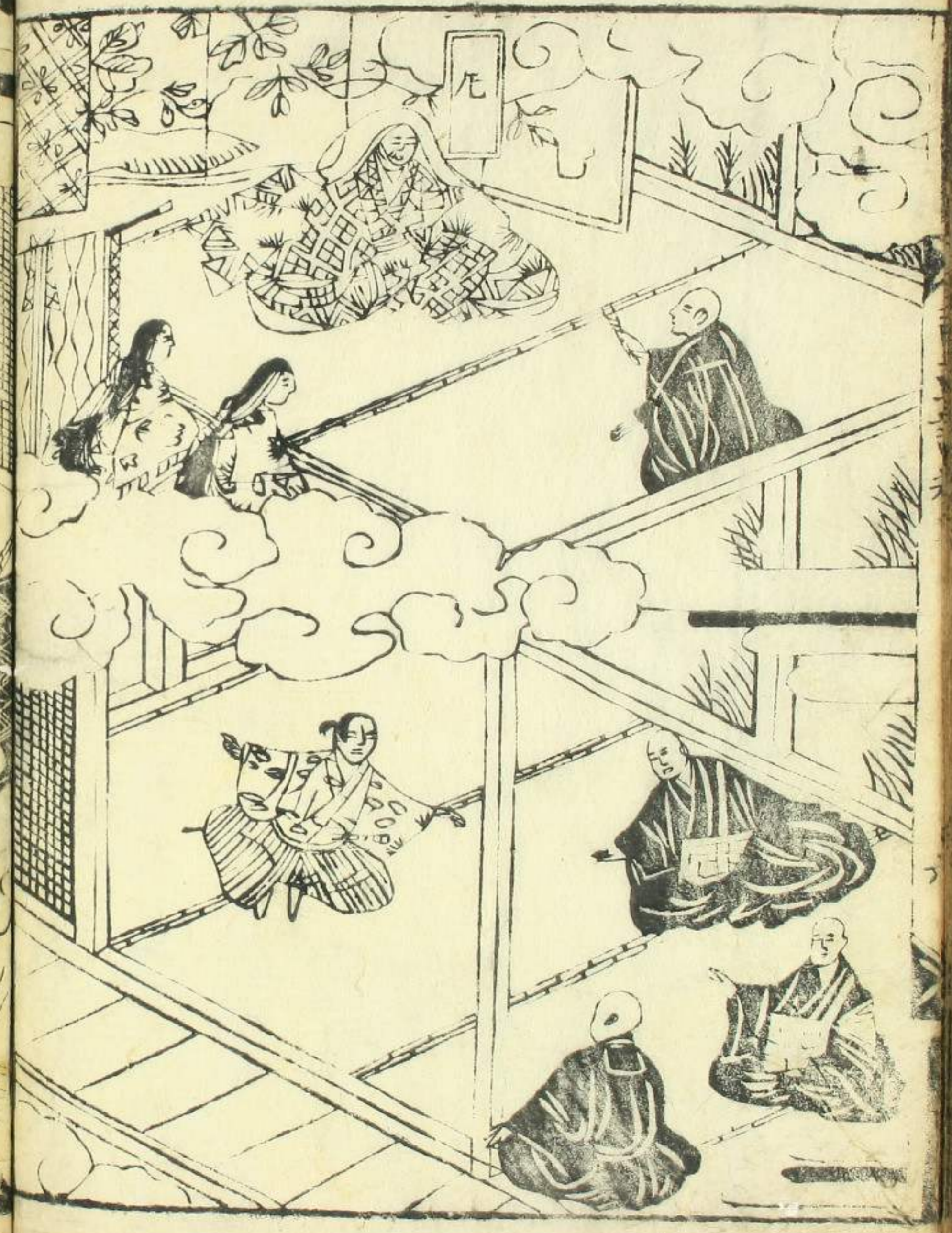
一七日の雨ありしとありて七月四日より二十七日
 ありしと請雨經念佛ハ齊戒真言等と誦
 ありしと天より雨とありしと地より
 ありしと多寶寺淨光明寺の數百人
 ありしと

佛の行者ありしと日蓮が法門よりありしと
 ありしと雨ありしと念佛無間の法門ありしと
 百五十戒ありしと良觀の弟子ありしと
 ありしと法花經ありしと日蓮が弟子ありしと
 ありしと忍性ありしと忍性ありしと百二十人の
 僧ありしと六月十八日より二十四日より
 ありしと





古
本
集
卷
三



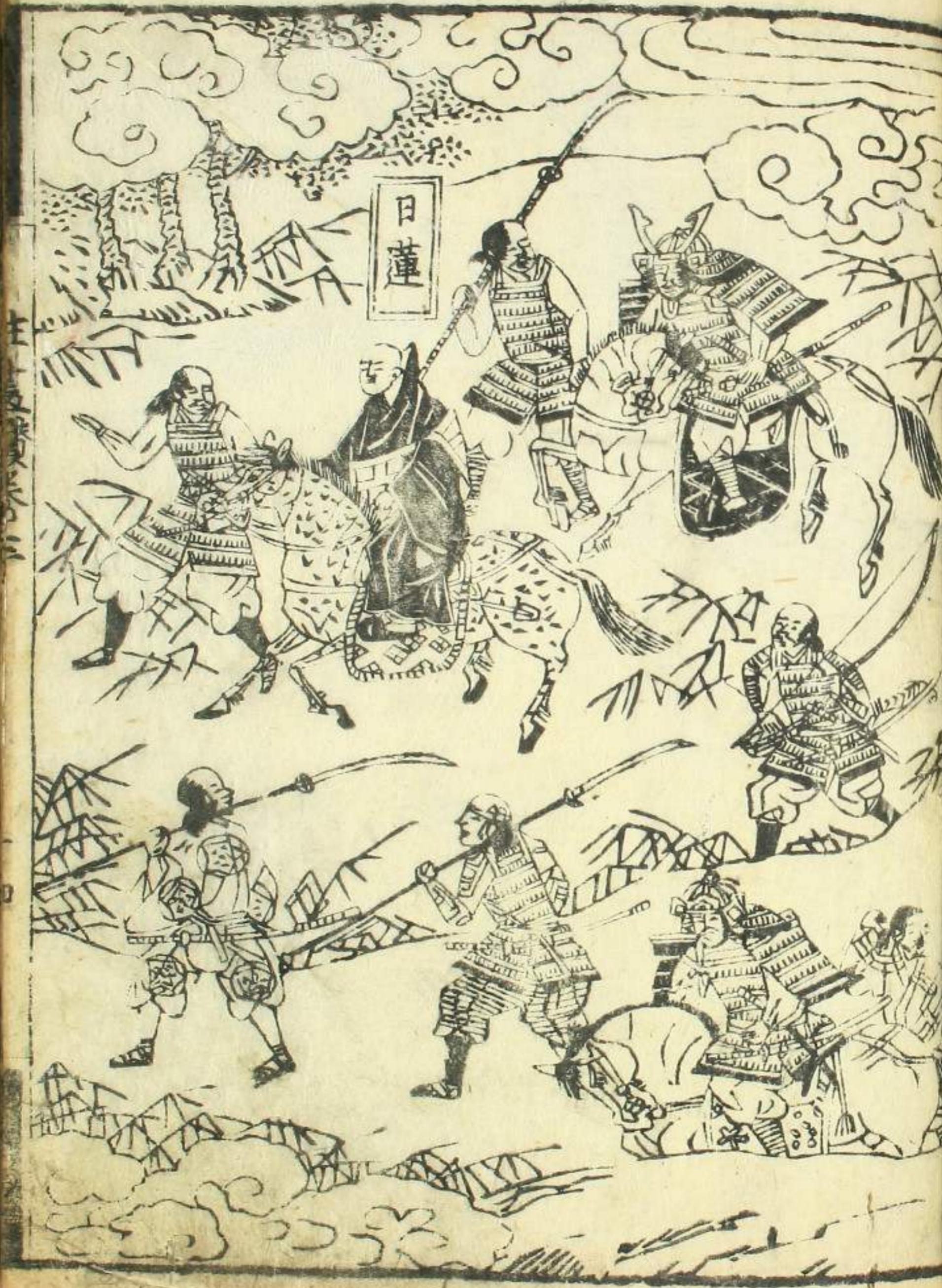
龍口頰座御難第十六

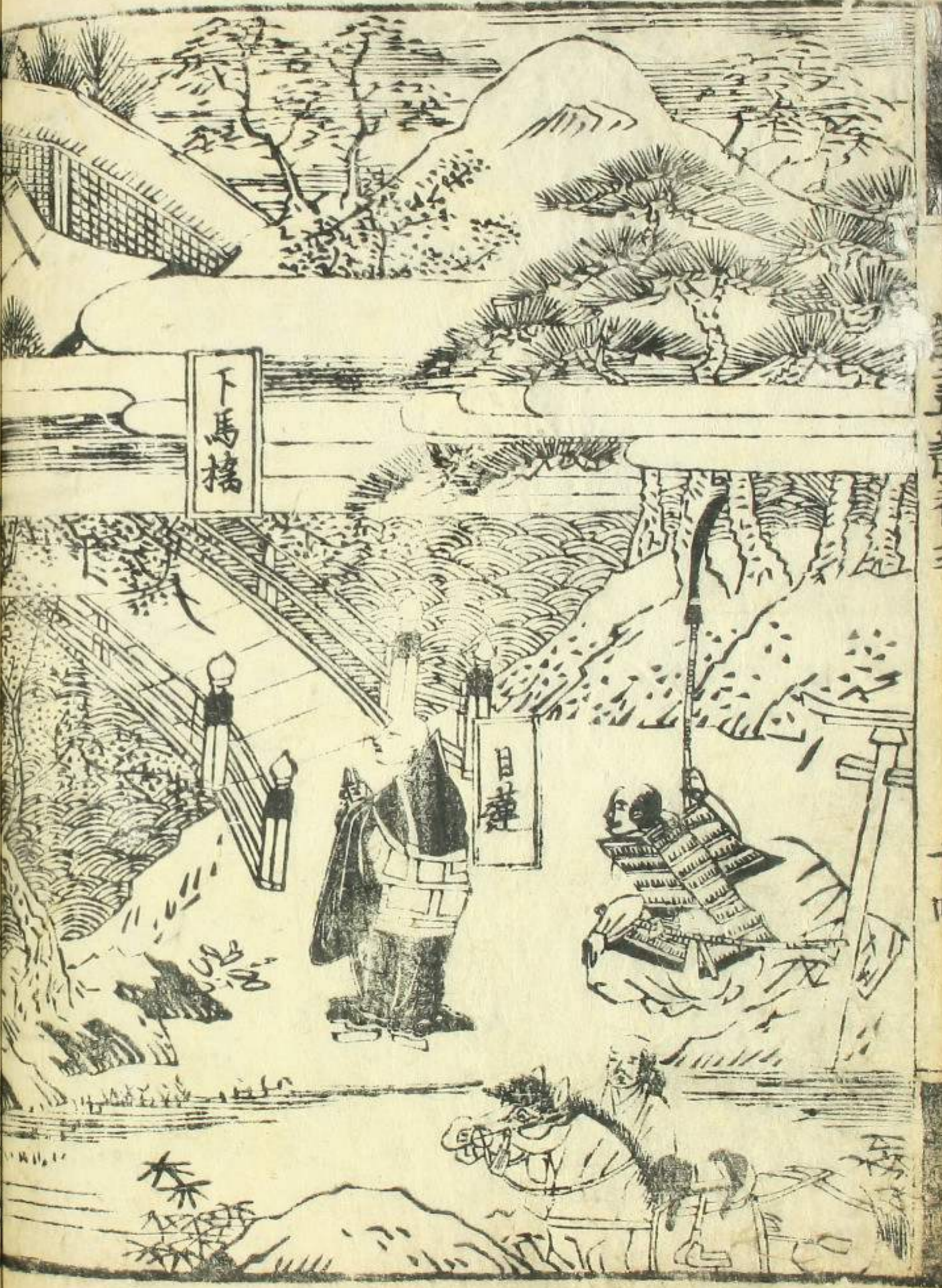
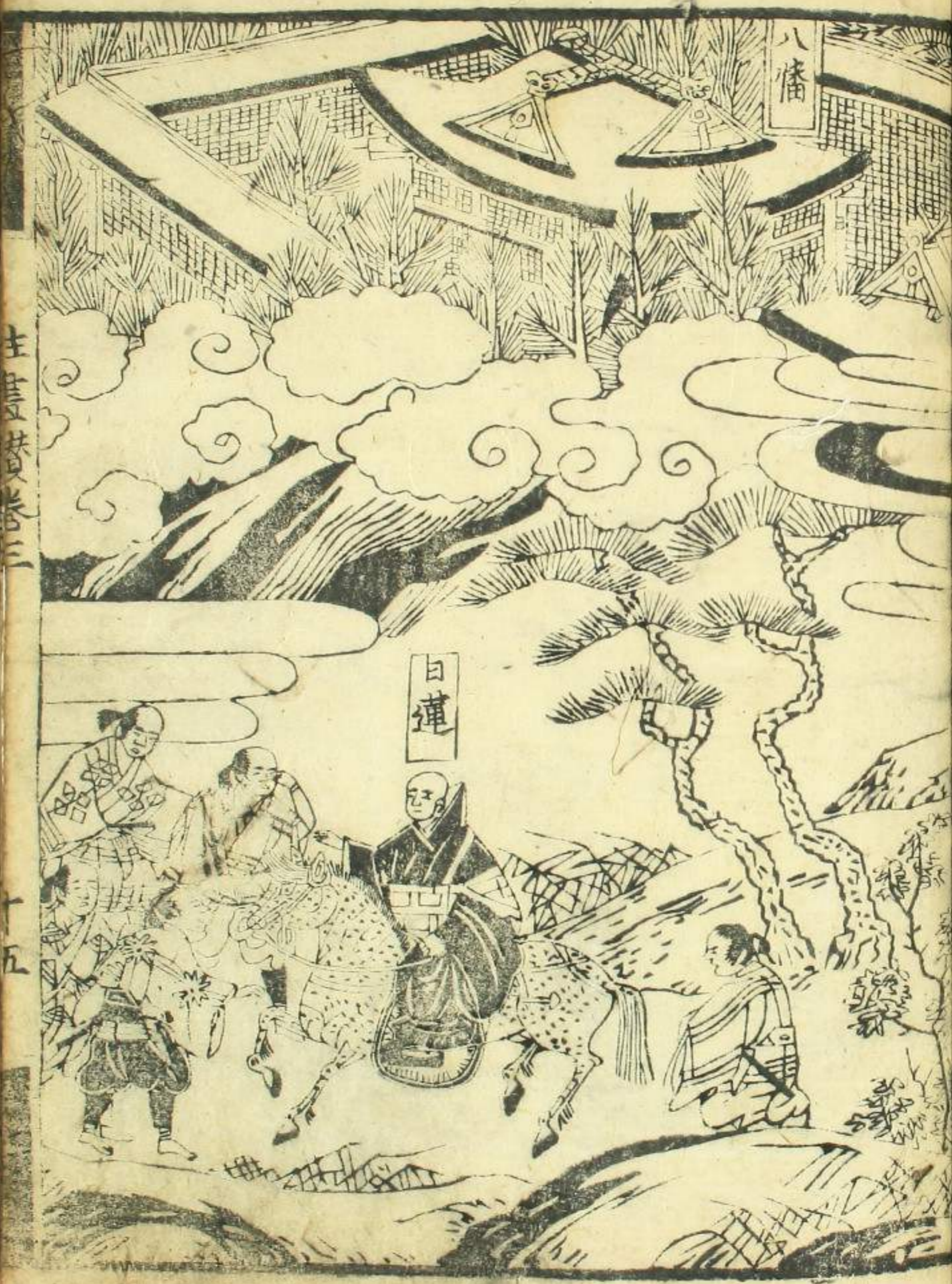
文永八年（一〇九一）のひつじ。九月十二日。頼綱以下
の數百人の武士等。各越の小菴（せうあん）に來りて。聖人（せいじん）の
らめり。聖人のまゝ。日來の存分（ぞんぶん）に法（ほふ）
門（もん）をひろめ。のり。法華經（ほふけう）にて
まつ。名を十方世界の諸佛の淨土（じやうと）におも
む。さうひる。法華經のため。くさ
き。くさひられ。い。あ。を。入。る。
玉（たま）と。い。る。く。く。小菴（せうあん）を。く。南（なん）は。す
る。く。ち。の。伊和瀬の大轉（たいてん）。口（くち）。夜（よ）

の袖をひきき。諸人又あつ。身體（しんたい）をひ
ま。本間（ほんま）。右（みぎ）と。げ。つ。頼綱（らいきやう）を。ま。ん。ん。
の。て。み。聲（こゑ）と。あ。く。あ。し。す。
聖人（せいじん）齒（は）を。り。て。高聲（かうせい）の。さ。め。て。か。へ。た。ま。ん。ん。
日蓮（にっれん）を。日本（にっぽん）の。柱（はしら）を。り。ま。ん。ん。日本
國の柱（はしら）を。た。た。つ。百日の。う。ら。ま。志（し）。い
ん。さ。や。くの。さ。ん。ん。や。う。ら。お。う。へ。し。の
ほ。め。こ。ち。の。さ。ん。ん。此國（ここのくに）の。人。く。う
ち。ろ。さ。お。の。こ。な。び。の。も。り。し。き。し。
お。へ。し。建長寺（けんぢやうじ）。壽福寺（じゆふくじ）。極樂寺（ごくらくじ）。念佛者（ねんぶつしや）

ともよまのよめしすくはあまのりるり。後生
 なきううごんし。不^レ輕^ク菩薩^ノ杖^木瓦^石の
 るし。覺^レ德^比立^ノの刀^杖のりし
 薩^ノの再^レ談^ス。大事^ノの妙^法をひろめまへハ
 大方^ニ又^レのりまをまよふ。佛^ノ意^ヲのりし
 のひ。天神^地祇^も守^レ護^スをくハ。此^ノ大方^ニま
 う建^テのりつごま。法^華經^ノと天
 下^ノのひろめものも。末世^ノのち。佛^ノ果^ヲ
 入^レま。





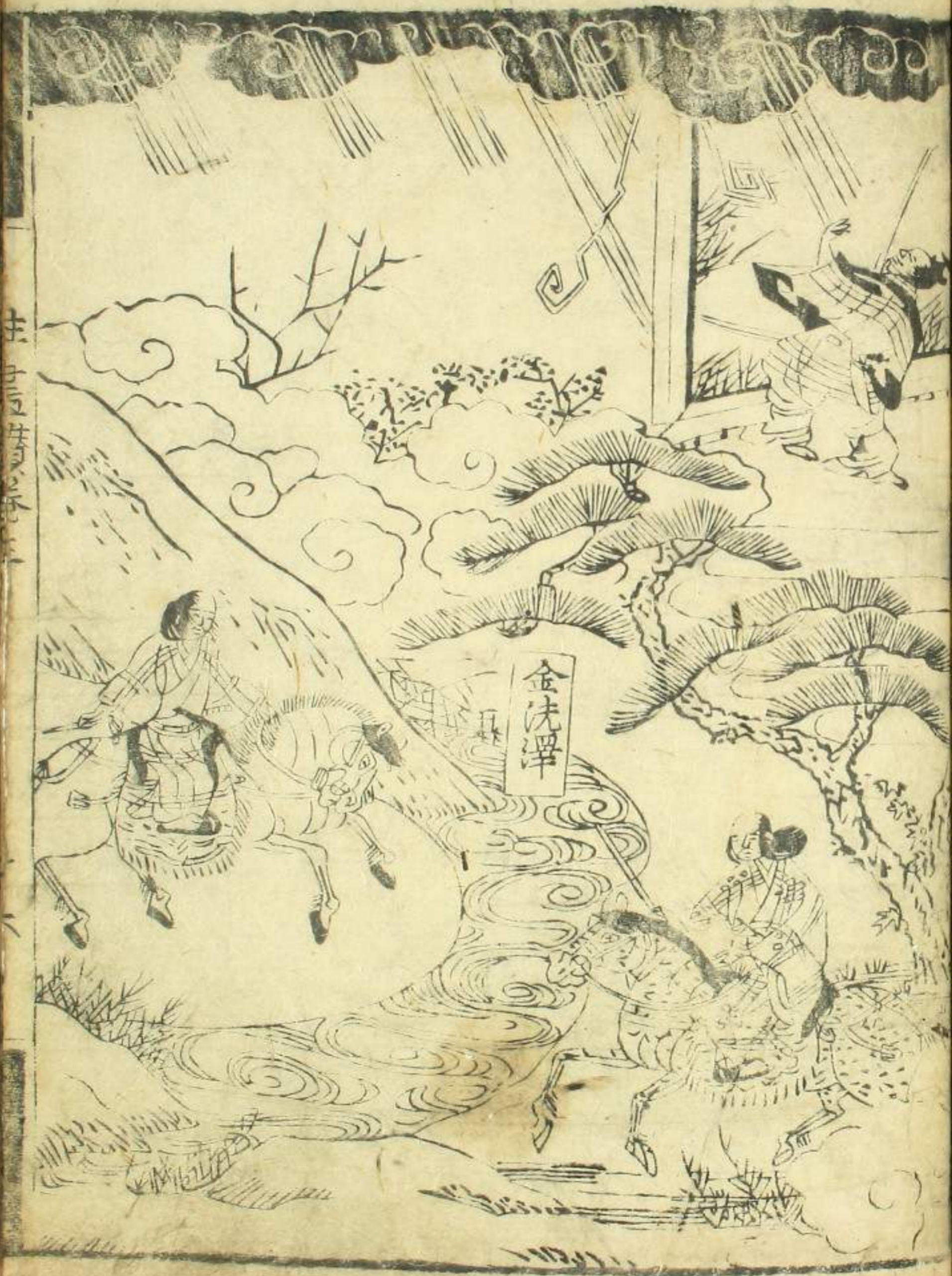


主君登林良卷三

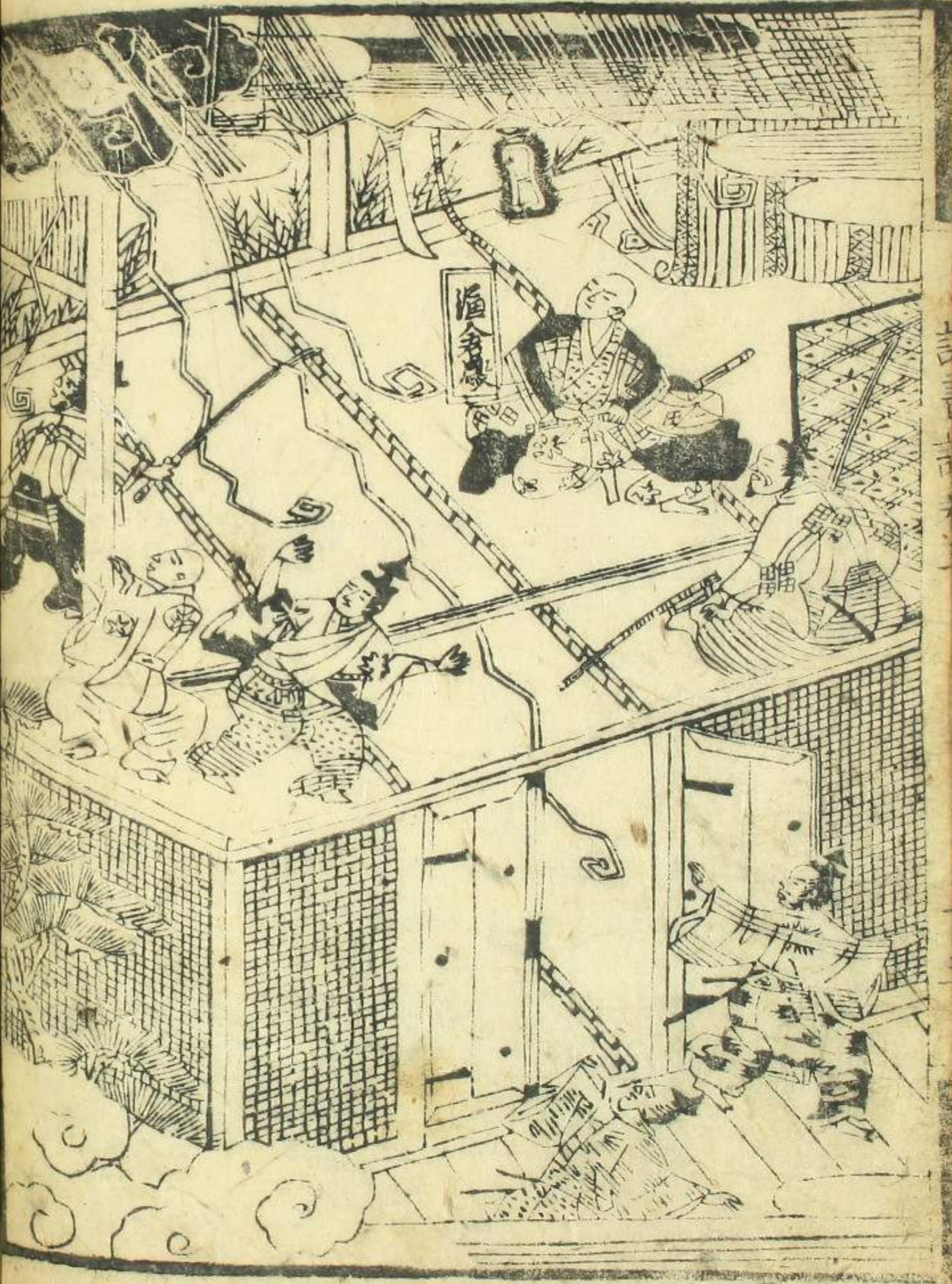
十五

主君登林良卷三

十四



生...
...



...



註畫讀卷第四

赴依智第十七

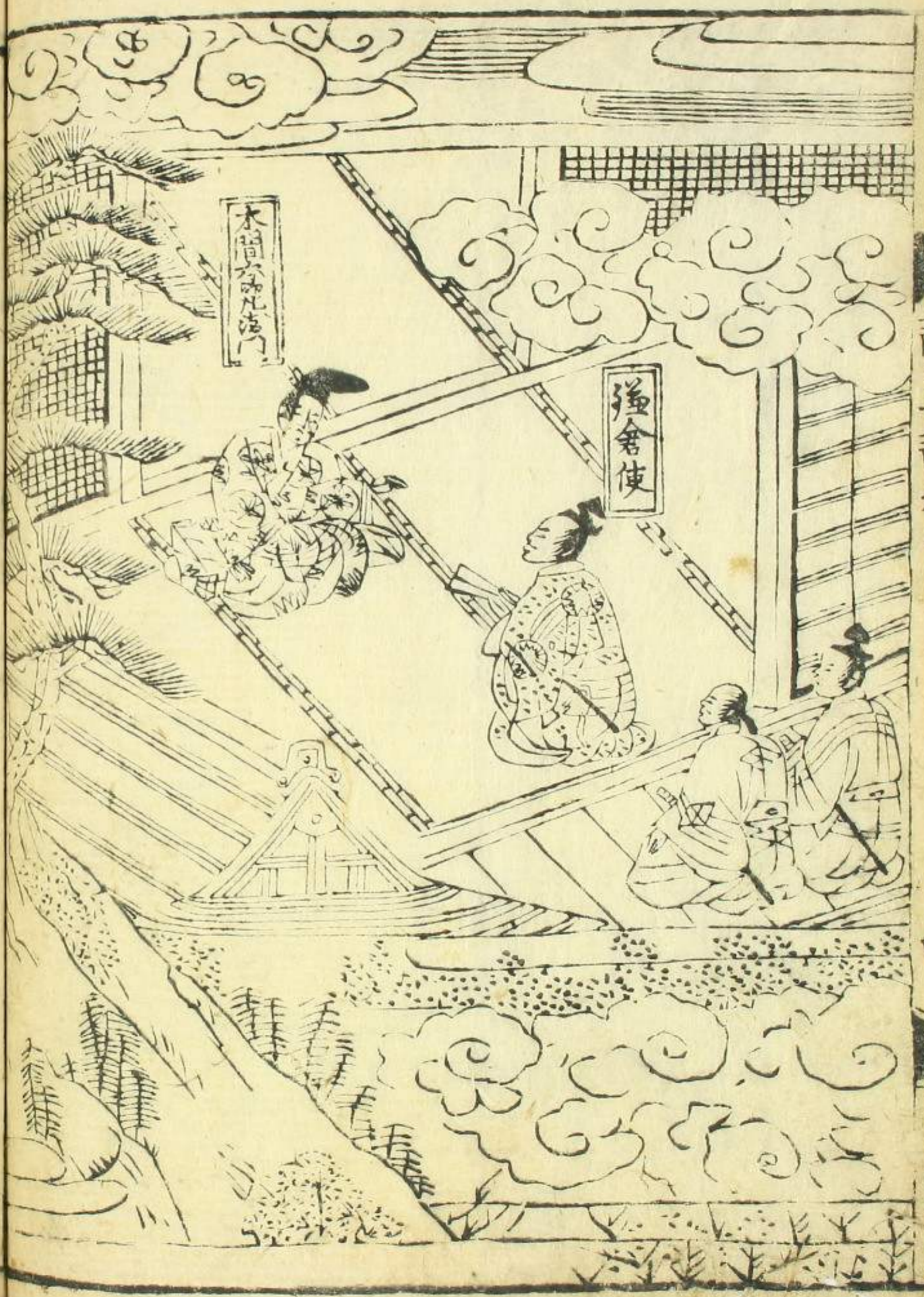
あつらひはあひ龍と出て。十三日の午九刻。相州
 愛甲の郡。依智の村。本間六郎左衛門尉重連
 がたつとて。いはいのことも。自派のつと。や。目来
 き我うがたのことも。阿弥陀佛をすすて。終へて。し
 り為るゆへ。いはい。奉る。昨日の夜。不思議
 の事共々。まのあつらひ。おれが。奉る。つと。つや
 存る。ゆへ。いはい。いはい。念佛を。いはい。せ
 ら。念佛を。いはい。念佛を。いはい。誓言

日蓮上人



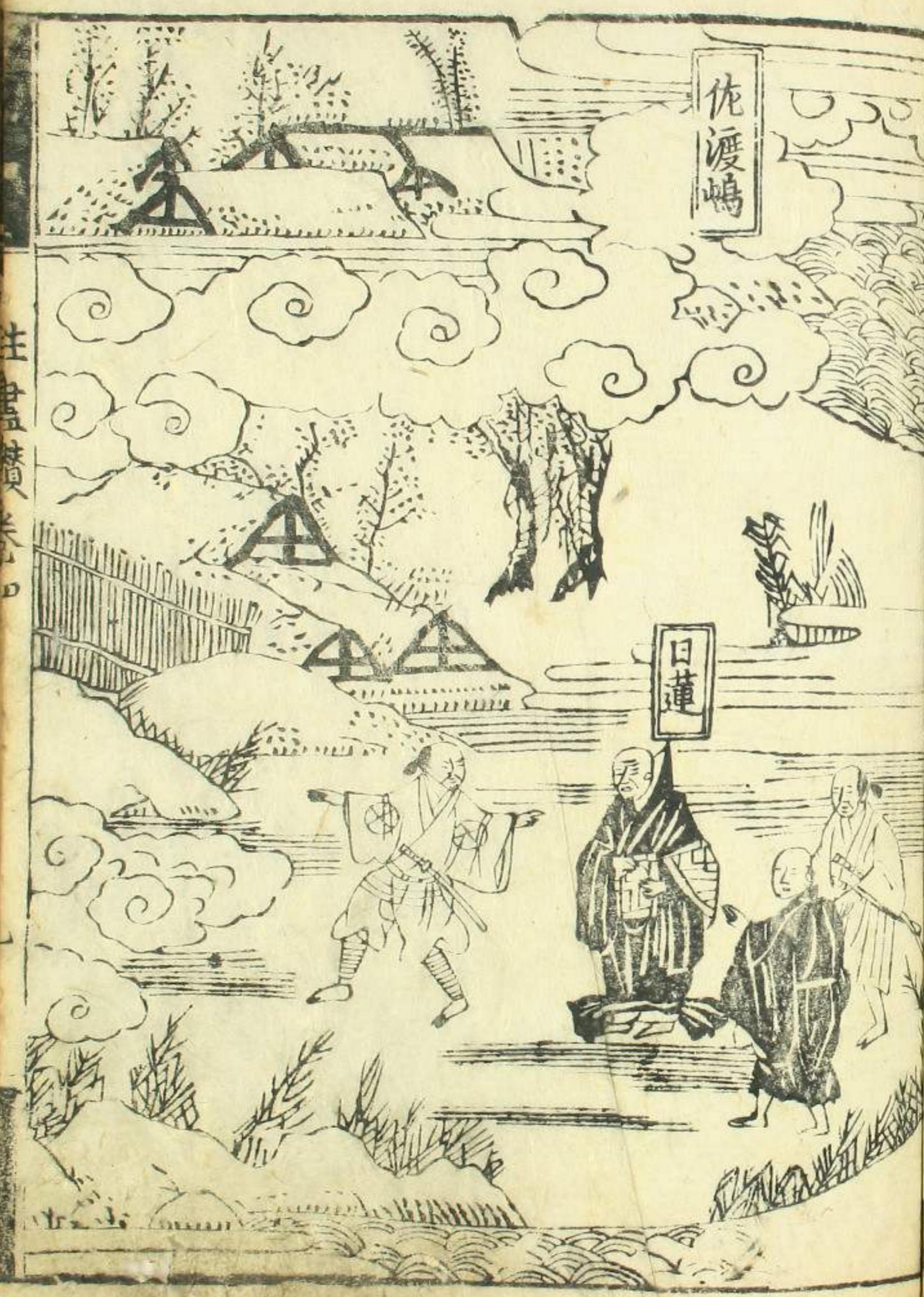
日蓮上人





籠中遣状第十八

同年十月三日。依智^{みち}なる。鎌倉^{くまがた}の籠中^{かごちゆう}に
 ある。五人の中へ状有。此月十日、佐渡^{さど}の嶋へ
 うつなりをのこし、法華^{ほっけ}經一部^{いっぶ}つ。あまのり
 し。我身^{わがみ}もひひ、父母^{ちちおや}兄弟^{あにがへ}もよ。あまのりし
 まし。今夜^{こんや}のまじまじ、付てま。いひま
 し。申^{まを}せり。籠^{かご}と出^でるを給^{たま}り。明年^{あした}の春
 めす来^きるのへ。あまのりし。同^{どう}九^く日^{にち}も
 別^{わか}れ、日^ひ朗^{らう}くをまのりし。日^ひ蓮^{れん}へ明^あ
 日^ひの佐渡^{さど}の嶋^{しま}へまのりし也。今夜^{こんや}のまじまじ、つぎ



佐渡嶋

日蓮

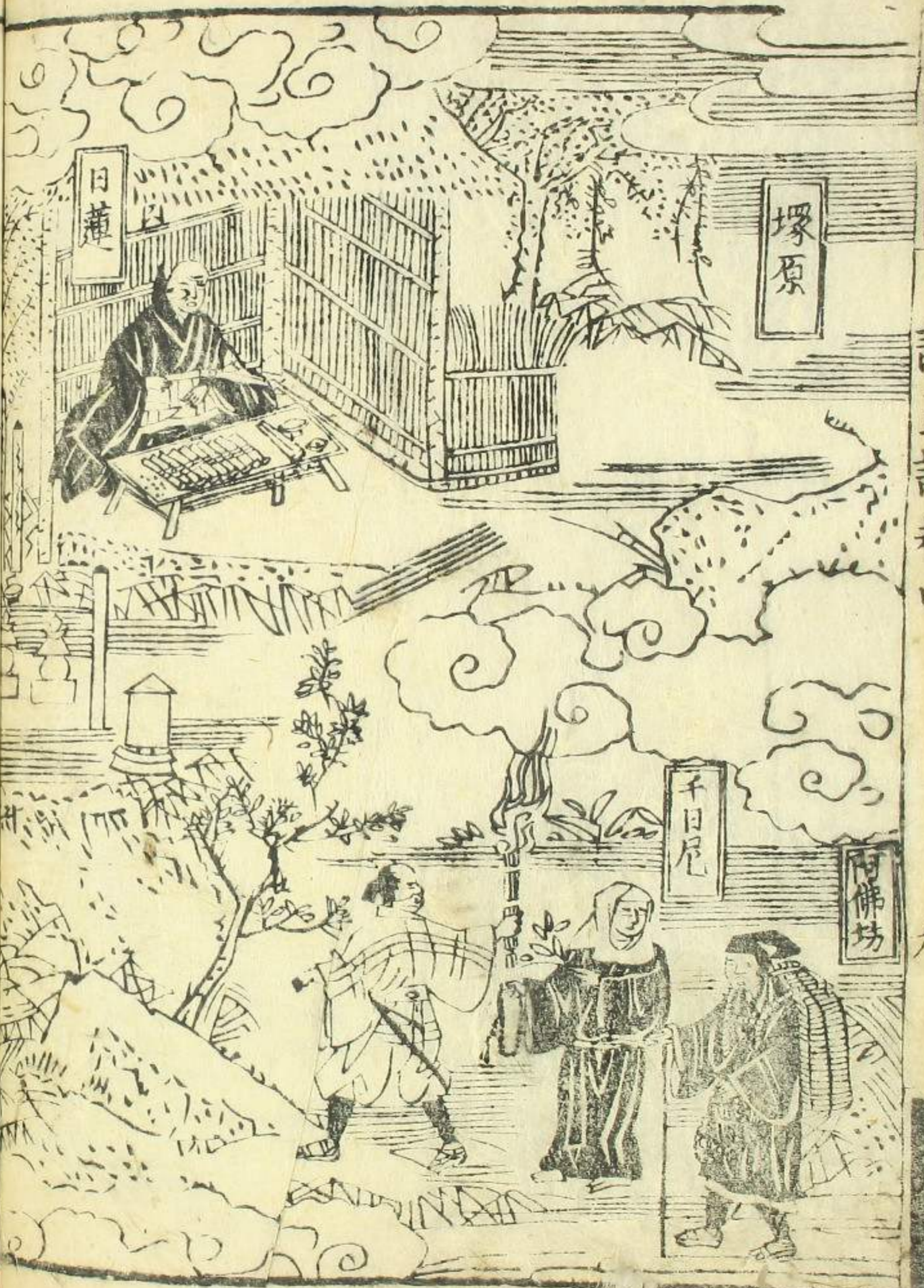
土佐國高知郡



日蓮一人

日蓮

土佐國高知郡



諸宗問答第二十

國中念佛者百人あまのひまへにさつしほ
 と守護所へ詔重連のりくぢれづへん入るあり
 きの由鎌倉より入状ありあやまる事あり
 重連の大事なるべしぞれするよ只法門をのつてせむ
 文永九年壬申正月十六日。當國并
 鄰國越後信濃ホの僧俗ものまゝあつまる塚原
 ひつとひあひまつく各々一たぐりあつまる事なり
 聖人ハ止觀真言念佛禪律ホの文義一こまりん
 後能叙く瓜を切大風ノ原をるひつとくはし



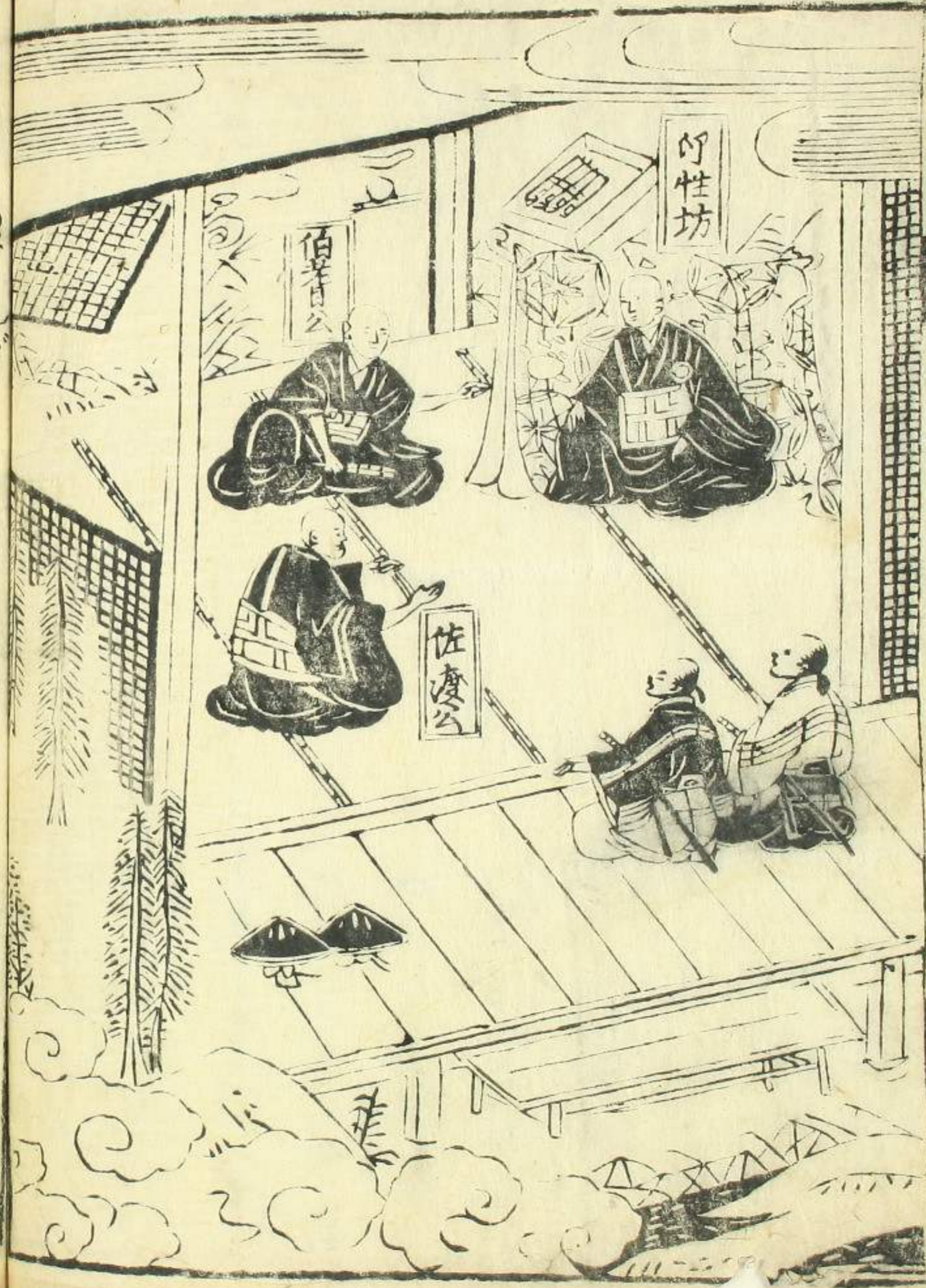
來のぞめり僧とて師座に歸依する者多のり

重連進來第二十

各たいきんす時重連は向て乃終り鎌倉を
 流らるる合てやきく七月より聖人の終り
 鎌倉に近日りくともふしつそまのりく高名せ
 り。重連はのこまひし。案乃まら二月十一日
 京都鎌倉より大なるいくとも。大將多死も
 此事。あつるまら花乃風よりちりやらりし。
 是や聖人つひは高山よのがま。天よむつて大
 をしちやうとせしつり。法華經乃文む
 るしつ。諸天のちうひたがりすハ。まら

まらちみわがたなるしよらり。ちるしとみきのど
とよめめめへし。眼前もかんきやくの難なる也。
矢乃せめなる事。うごひる。びあしそのあで。
是を信ぎんし。相摸守。日蓮上人と流罪し。
百日の間は兵乱。あひぬづつとりのつてやく
を思へ。わが門人。福遇十號。うごひる。う
のち二月十八日。本間。うごひる。うごひる。
今日あろとあろきくたすひそきめ。うごひる
やう正月十六日のあし。此あひご。うごひる
うごひる。うごひる。うごひる。うごひる。

蒙古國も一定来るべし。念佛無間も必きく
ふべし。ながく念佛申べし。日蓮の法りく
法華經をひろひる者。釈迦如来の法使るも。
日蓮ををろろ。うごひる。うごひる。うごひる。
うごひる。うごひる。うごひる。うごひる。
あつ所のるん也。此後蒙古。廿国と責む。汝も
あつをんなく。うごひる。うごひる。うごひる。
うごひる。此法坊。神通の人也。だそろ。うごひる。
今も念佛者。うごひる。うごひる。うごひる。



尼問答第二十三

問答の後二三日過て。日蓮坊法談入時。聽衆の中。且一人す。そのい。問てい。ま。ま。法華經乃三の卷。う。う。う。女。と。字。る。佛の。聖人。ま。つ。尼の。う。や。の。色。と。み。く。の。法。う。是ハ先日問答。う。法。ま。る。う。つ。う。市性坊。と。ま。ま。を。ま。し。う。ま。し。た。め。う。來。ま。る。う。ま。あ。く。い。ん。を。む。う。へ。う。法華經。と。な。の。つ。る。の。法。う。ま。ま。ま。な。く。て。ま。の。う。う。う。ま。ぬ。聽衆。乃。中。う。て。市性

法華經卷の

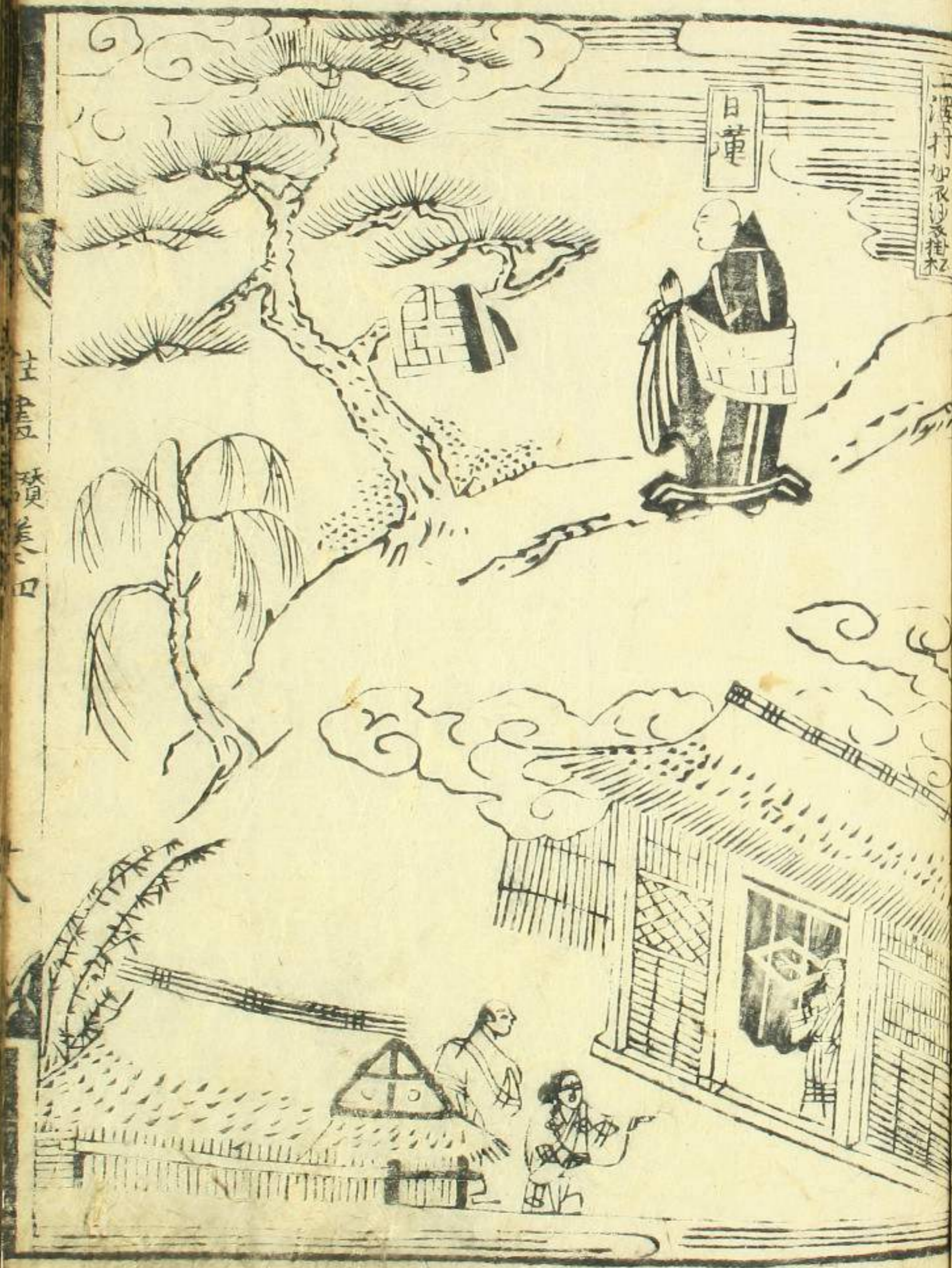
十四

前司狀第二十四

文永十年癸酉夏。おる。さき國の内石田の
 一谷の村。百姓の入道の家と宿として住居。此所
 松の木一本あり。げさき入の松のゆつ。ゆつ木
 のり。て天。むむ。て。させいあり。其は念佛
 者の僧。ら鎌倉。あ。武蔵の前司。
 日蓮坊。彼媽。す
 堂塔。ひ。僧一人。む
 跡。佛。火。水。

高山のやつ。大音聲。とあき。日本
 國。其聲。國內
 前司。大。此
 守護代。狀。し
 良觀。此。狀。と。才。子。の。沈。渡。へ。す。
 其。狀。沈。渡。の。國。の。流。入。の。僧。日。蓮。才。子
 沈。渡。へ。す。た。ら。む。の。し
 今。後。彼。僧。あ。ひ。し
 沈。渡。へ。す。た。ら。む。の。し
 沈。渡。へ。す。た。ら。む。の。し

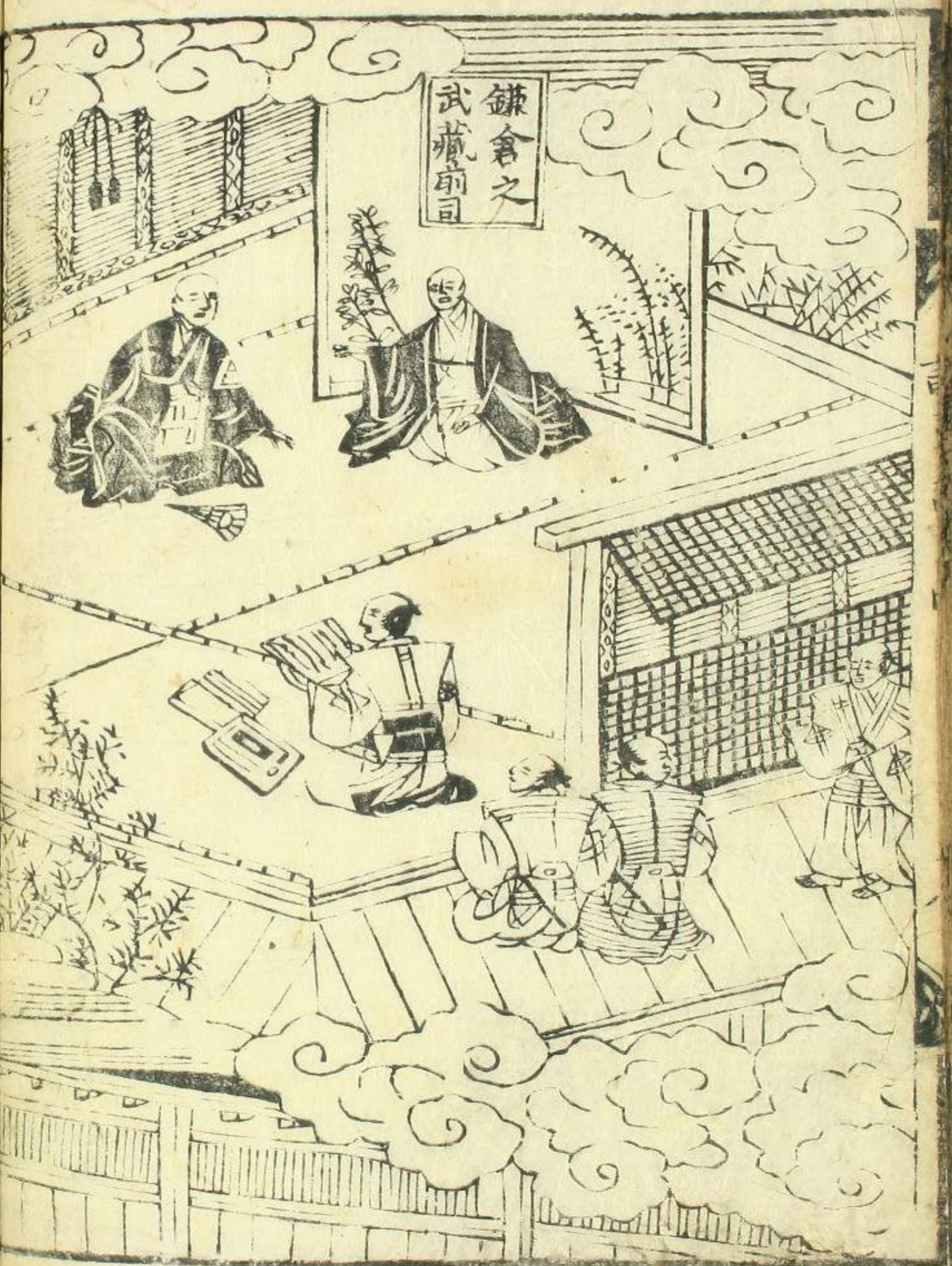
まこのころの所や仍る如件文永十年十二月
 七日依智六郎左衛門尉沙路觀慧判御状
 をあきこく。國中下知のわう。あきくがらふ
 ちうしびあうひや日蓮坊乃一はい。仇渡るると
 の所へわらうのあう。是をばまがらび。鎌倉
 ころあうたうらうのあう。あうしとく津こ
 とふせを致す。舟うう。是をまらうらう。あ
 うひや市町のうらうひもらうらう。あう
 らくあう。ぼりり乃九横のたうらう。あうらう
 のあり



住書 積美 四

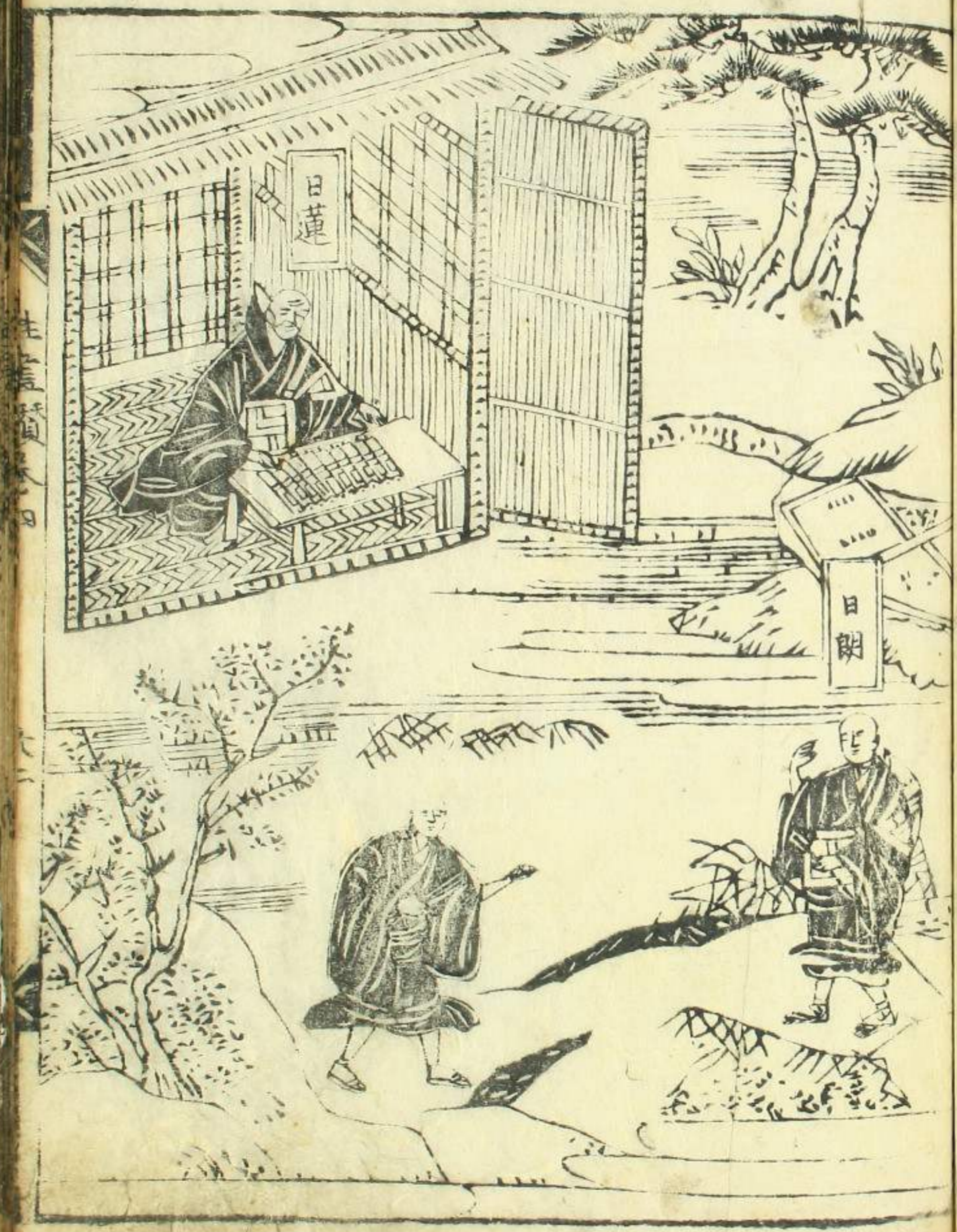


五十五

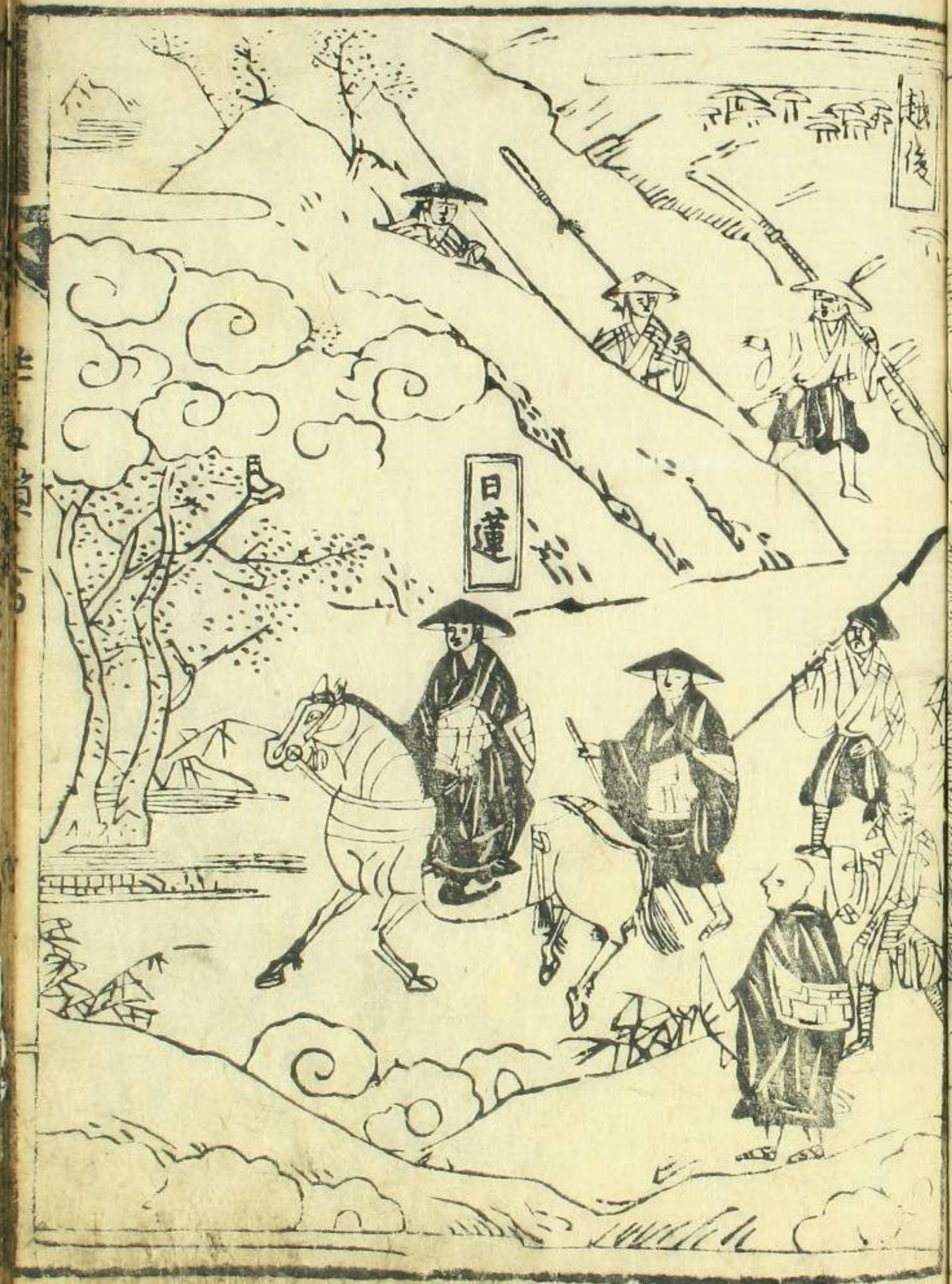


をとつて進のくとも種々の物とするのひとも
 の嶋のたのじきのみ事四年の内八度也八度
 の此赦免状とりらめく山をあらまし
 けく海上のあやうき渡りく三月八日の夜半よ
 聖人のまへぬきまをよいつてなりあう
 三び錦倉より清赦免状とせりけく筑
 後公来るとうらむく聖人のひくこめ
 て清経ありしひひりひり其聲
 をよあしそして経とありを涙のしをひ
 其あうらぎをりんじとらうとくぬい

まつとりのしじ其時念佛者うらみ
 よう阿弥陀佛のたをよ善導法然とそ
 しくきのなりておとせりあうら
 るもくまやいあるりめくさう
 ちもくまらしをよびしあよむひ
 日はけりつくと出て網羅の律う
 まく律うとらう十五日よ舟のり寺泊
 らんととわのくと大風うつく幸二日
 をす死柏崎よけえ其日府中お付
 する又越後信濃の念佛者くものく



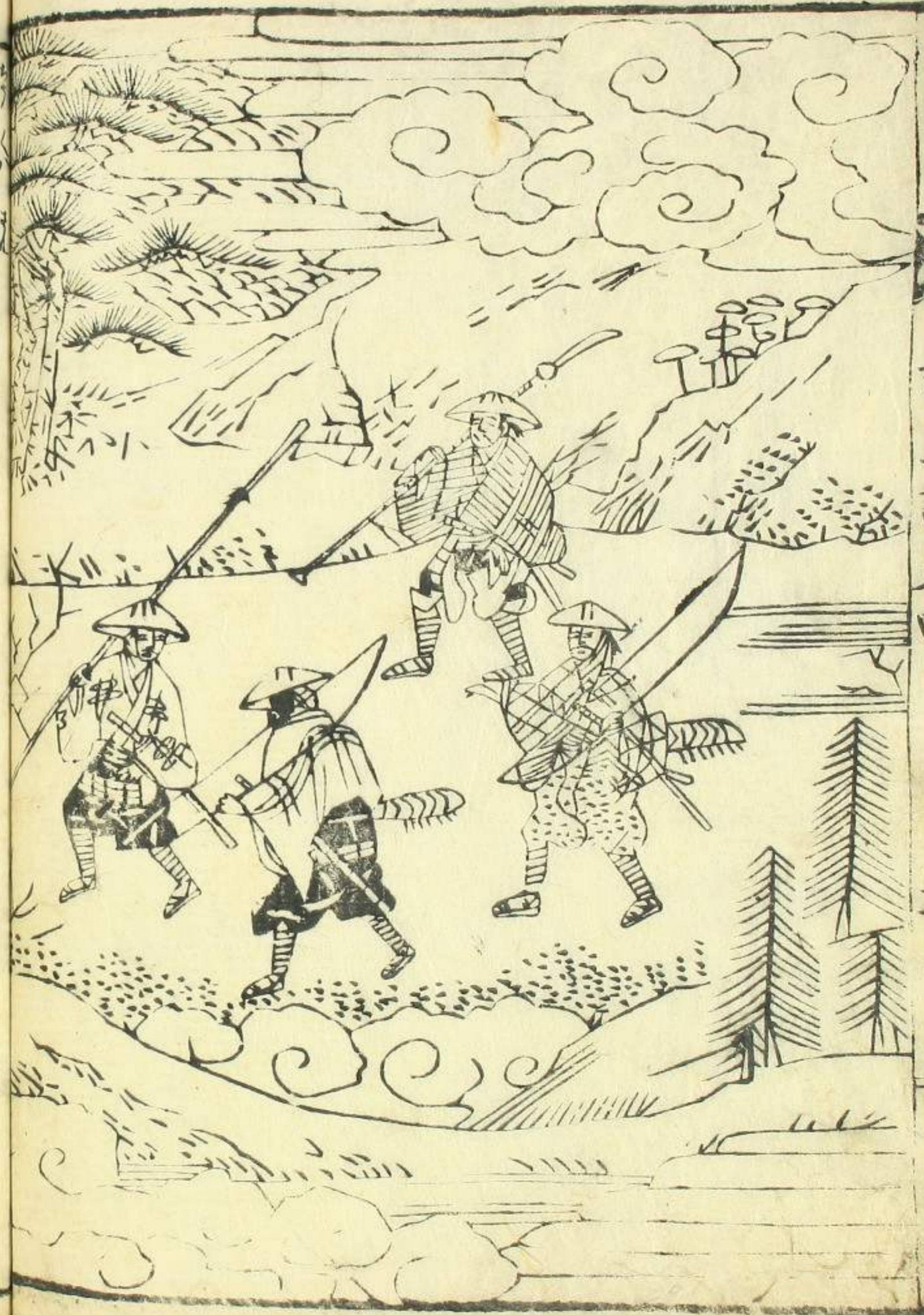
まま。きやうじしん乃ほみく、佛乃あまふと
 越後の府中より
 月乃廿六日、錦倉へ又給つる。世時聖人の
 年ハ五十三なり



日蓮

日蓮

九二



註書讚第五

重謁頼綱第二十六

同きや〜の四月八日。〜にて頼綱頼綱まみし
 の。頼綱頼綱〜を〜まひ〜事し
 諸人諸人座座におり〜念佛無間念佛無間
 の法門法門を〜。聖人聖人經論經論をひき。あ〜。頼綱
 のい〜。念佛無間念佛無間の法門法門張張を〜や〜
 の。聖人聖人の〜。な〜。火火を〜。國
 求羅求羅〜。身身を王土王土〜。念
 念佛念佛と無間無間

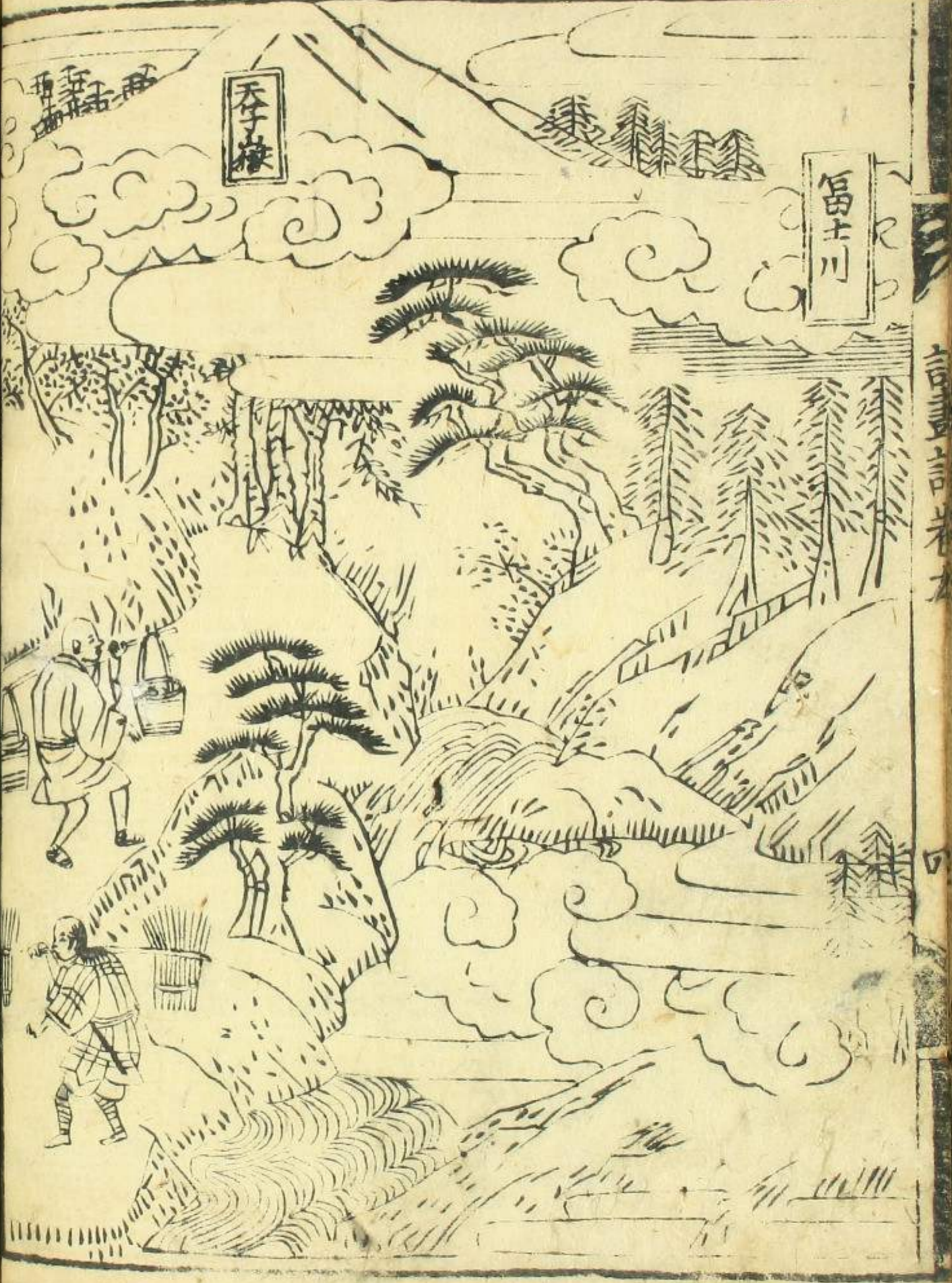
嶽雲とけくね西もや七面嶽のくく雪
 つらりつらり白嶺嶽のくく雪
 こゆるみらくあやしく雨のあらし
 もやもやの光を本尊もくく
 かすこの夜をこゆる月をまらく
 せこゆるあらしをまらくひまはく
 ころろ麻の束もくく解脫のくく
 ころろ谷もくく水もくく真性の月を
 るひくく山路もくくひろくく孫康の
 雪氷をくくゆくのまやしく風もくく

忍辱の夜もくく采論談もくく山中も
 きこく夜もくく法華讀誦もくく天
 ひくく九年のりひくく妙法華經と讀誦の
 靈鷲山もくくひびもくく聖人のくく佛
 菩薩のくくくくくくくくく月
 日張をくく讀誦もくく法華經の
 虚空もくくくく身延もくく
 のゆもくく

たらもくくかのもくく
 ぬもくく法のもくくのぬ風

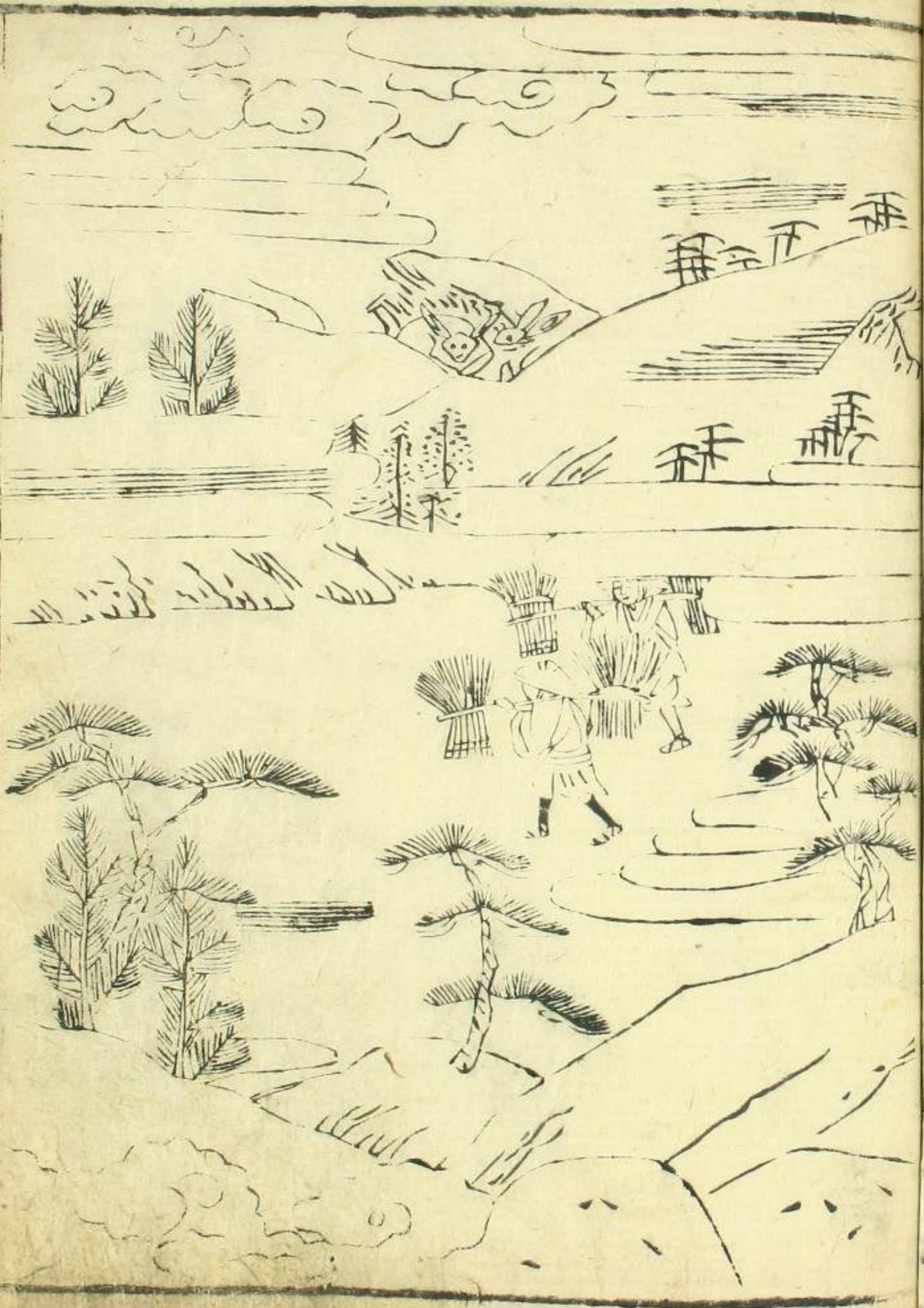


主書黃卷五



主書黃卷五

七面池



七面池

白峯

身延山

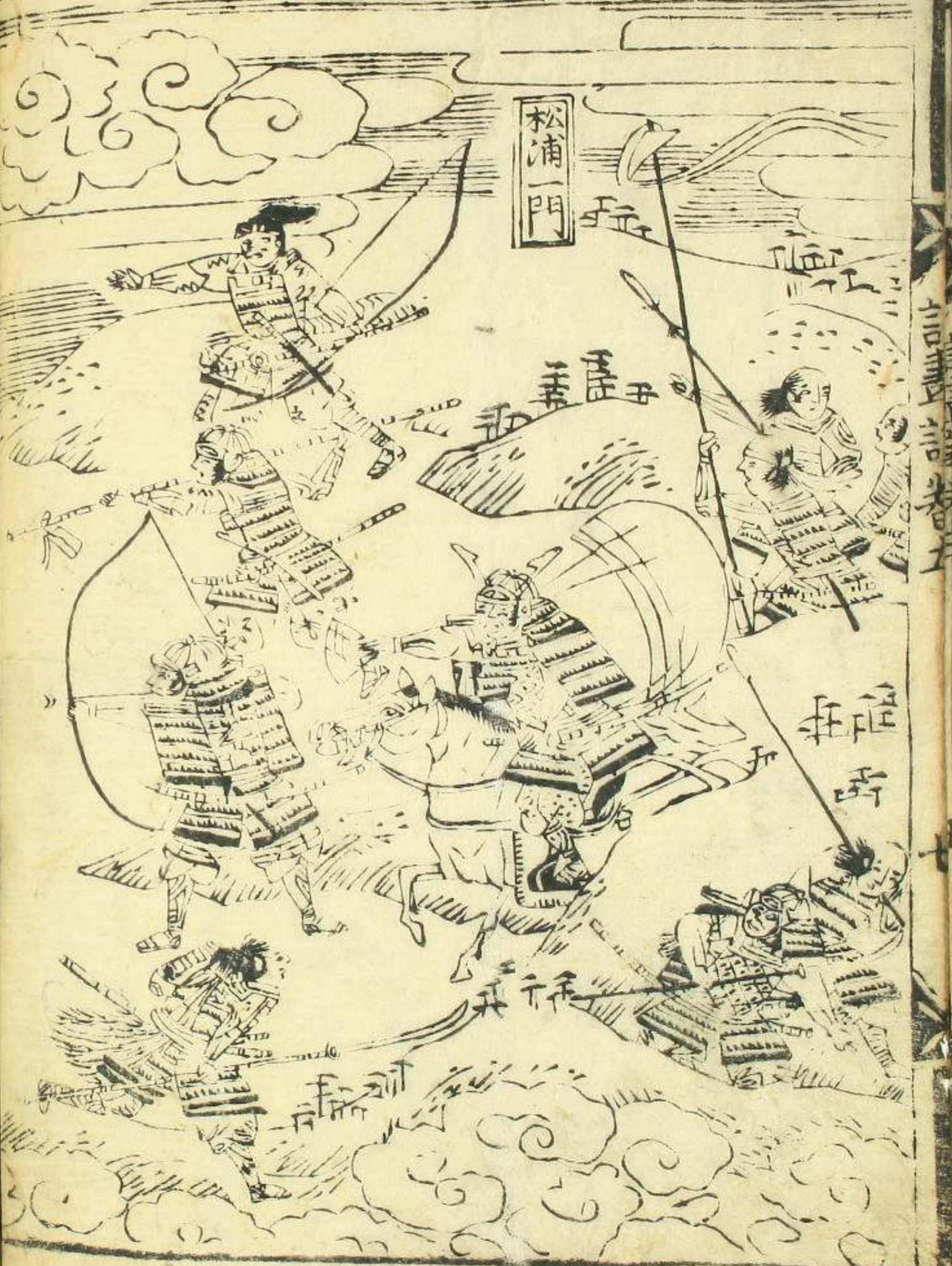


七面明神

蒙古來第二十八

同(お)き(お)年(ねん)十(じゆ)月(げつ)五(ご)日(にち)の(に)布(ぬ)代(だい)刻(き)る(に)對(たい)馬(ま)國(こく)府(ふ)の(に)八(は)幡(ばん)
 宮(みや)の(に)假(かり)殿(てん)の(に)内(うち)より(に)大(おほ)火(ひ)燄(えん)り(に)つ(に)お(お)ち(ち)り(に)さ(さ)日(に)く(に)
 の(に)あ(あ)く(に)る(に)對(たい)馬(ま)の(に)西(せい)伏(ふ)寸(すん)浦(うら)に(に)異(い)國(こく)の(に)兵(へい)船(せん)四(よ)百(ひゃく)五(ご)
 十(じゆ)艘(さう)り(に)二(に)万(まん)餘(じゆ)人(にん)と(と)る(に)ま(ま)の(に)つ(に)く(に)よ(よ)せ(せ)さ(さ)く(に)六(む)日(にち)
 の(に)あ(あ)く(に)る(に)刻(き)る(に)合(あ)戦(せん)も(も)守(まも)護(ご)代(だい)資(し)國(こく)も(も)蒙(もう)ら(ら)と(と)
 と(と)る(に)あ(あ)く(に)る(に)い(い)へ(へ)と(と)も(も)資(し)國(こく)の(の)子(こ)と(と)し(し)て(て)い(い)く(に)
 同(お)き(お)き(お)年(ねん)十(じゆ)月(げつ)四(よ)日(にち)に(に)壹(いち)岐(ぎ)嶋(じま)へ(へ)を(を)り(に)ま(ま)と(と)守(まも)
 護(ご)代(だい)平(へい)内(うち)左(さ)衛(ゑ)門(もん)尉(ゐ)景(けい)隆(りゆう)城(じやう)を(を)り(に)ま(ま)と(と)守(まも)さ(さ)
 ら(ら)り(に)ま(ま)と(と)守(まも)と(と)蒙(もう)ら(ら)と(と)入(い)り(に)あ(あ)く(に)る(に)景(けい)隆(りゆう)に(に)

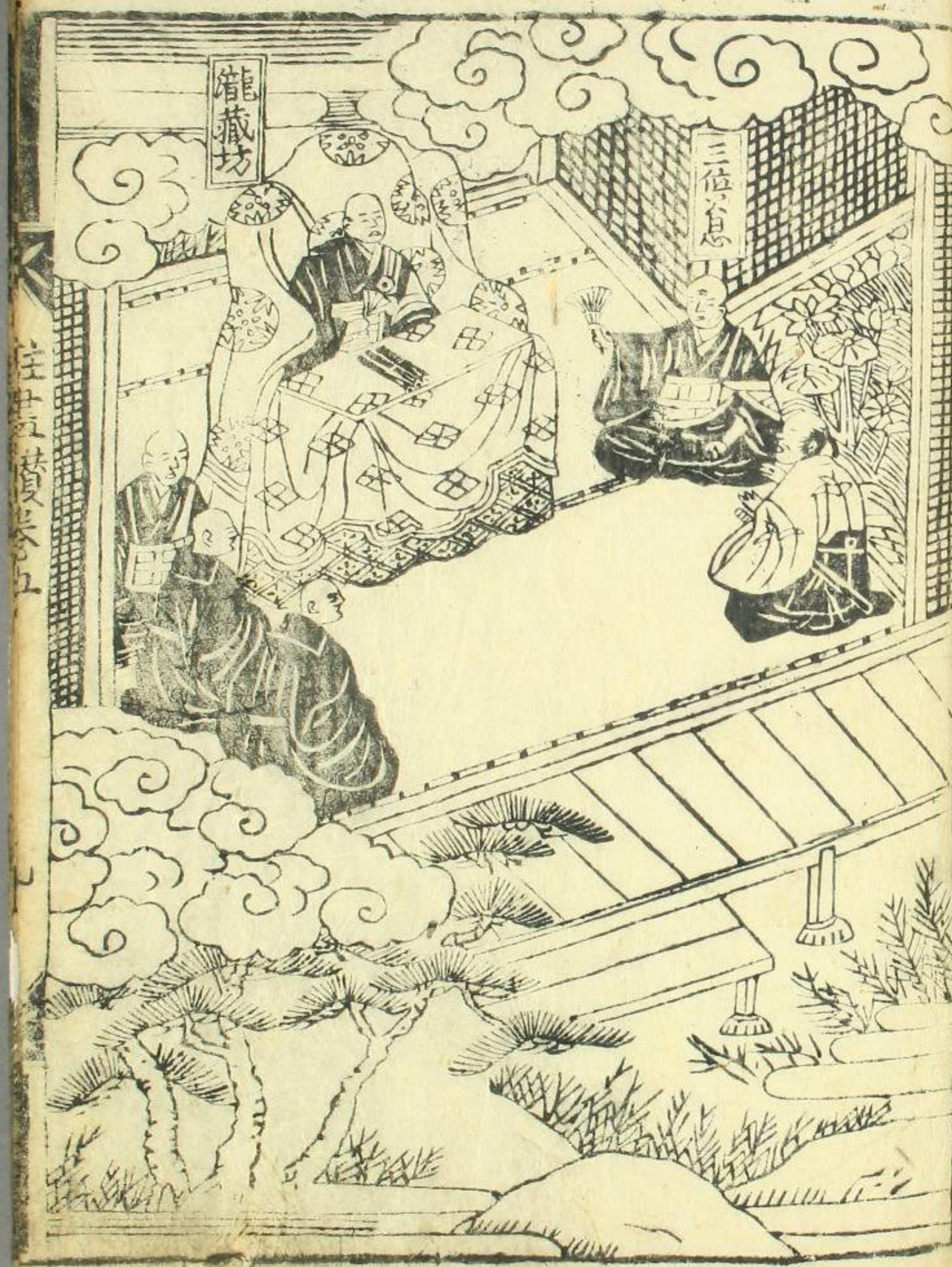
く(に)い(い)ま(ま)を(を)り(に)ま(ま)と(と)守(まも)の(の)嶋(じま)の(の)百(ひゃく)姓(せい)の(の)男(おとこ)を(を)り(に)ま(ま)と(と)守(まも)に(に)
 手(て)を(を)り(に)ま(ま)と(と)守(まも)し(し)あ(あ)く(に)る(に)い(い)へ(へ)と(と)も(も)ゆ(ゆ)ひ(ひ)を(を)り(に)ま(ま)と(と)守(まも)に(に)
 人(ひと)も(も)り(に)ま(ま)と(と)守(まも)る(る)肥(ひ)前(ぜん)國(こく)松(まつ)浦(うら)黨(たう)數(かず)百(ひゃく)人(にん)と(と)り(に)ま(ま)と(と)守(まも)
 同(お)き(お)き(お)年(ねん)十(じゆ)月(げつ)九(く)日(にち)の(の)刻(き)る(に)大(おほ)友(とも)出(で)羽(は)の(の)守(まも)直(ちか)泰(た)大(おほ)友(とも)の(の)次(つぎ)郎(らう)
 左(さ)衛(ゑ)門(もん)重(じゆう)秀(しゆう)難(なん)波(な)の(の)二(に)郎(らう)在(あ)り(に)助(すけ)菊(きく)池(いけ)二(に)郎(らう)康(やす)成(せい)
 九(く)國(こく)の(の)け(け)い(い)の(の)あ(あ)り(に)ま(ま)と(と)守(まも)に(に)ま(ま)と(と)守(まも)に(に)ま(ま)と(と)守(まも)に(に)
 夏(なつ)日(にち)蓮(れん)の(の)ま(ま)と(と)守(まも)に(に)ま(ま)と(と)守(まも)に(に)ま(ま)と(と)守(まも)に(に)
 ま(ま)と(と)守(まも)に(に)ま(ま)と(と)守(まも)に(に)ま(ま)と(と)守(まも)に(に)ま(ま)と(と)守(まも)に(に)



加藤 清 卷 五

龍象房第二十九

龍象房とつゆのあり。洛中^{らくちゆう}より人々をくらふ
 身とつゆのあり。洛中^{らくちゆう}より人々をくらふ
 鎌倉^{くまがら}より人々の肉とつゆのあり。命^{いのち}を乃^なり
 桑^{くわ}が谷^やよりて。説法^{せっぽう}し。不審^{ふしん}あり人々をくらふ。問
 答^{とく}より。ひろくつゆのあり。佛^{ぶつ}のよき。な
 り。六月九日^{りくごつくにじふ}。日蓮^{にっれん}の弟^{あに}弟子^{でし}。三位^{さんゐ}公^{こう}目^め心^{しん}と云^い信^{しん}
 難^{なん}問^{もん}と答^{こた}え。も



注世五法長卷五

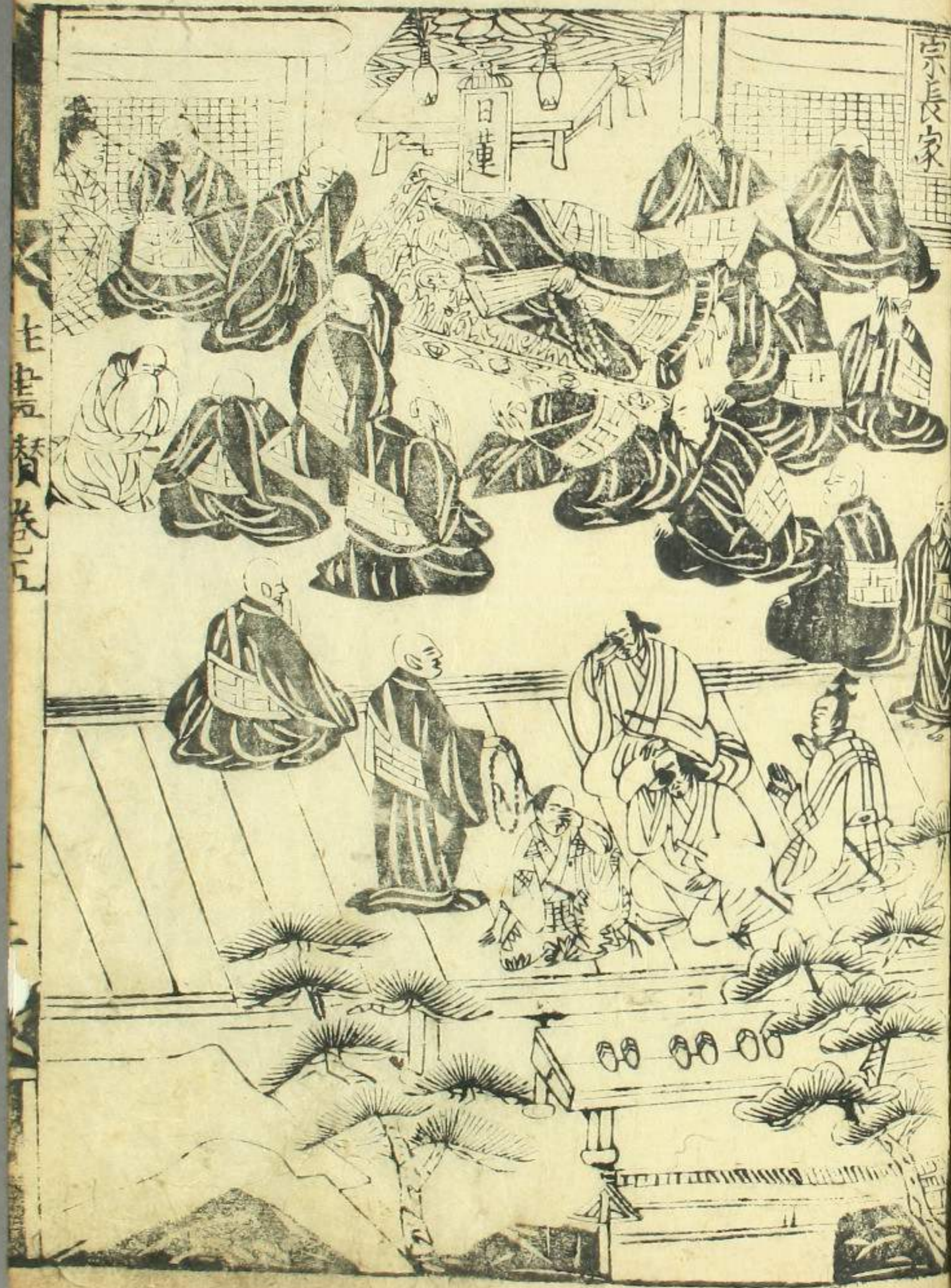
示寂第三十

弘安五年壬午九月八日入千の刻身逝乃を
をのく。ちも山より奉らる。九日大井。十日曾祿
十一日黒駒。十二日河口。十三日小呂地。十四日竹下
十五日関本。十六日平塚。十七日瀬谷。十八日武
蔵国荏原郡。千束郷池上村右衛門太支宗仲
の宿入の。同き女五日。鱗倉より来る。才子目
那。安国論を。とさうをぬひ。二十七日のうら。我
身死を。其時地神ひて。身と。身
を。是を。り。り。が死。し。と。成。と。さ。う。の

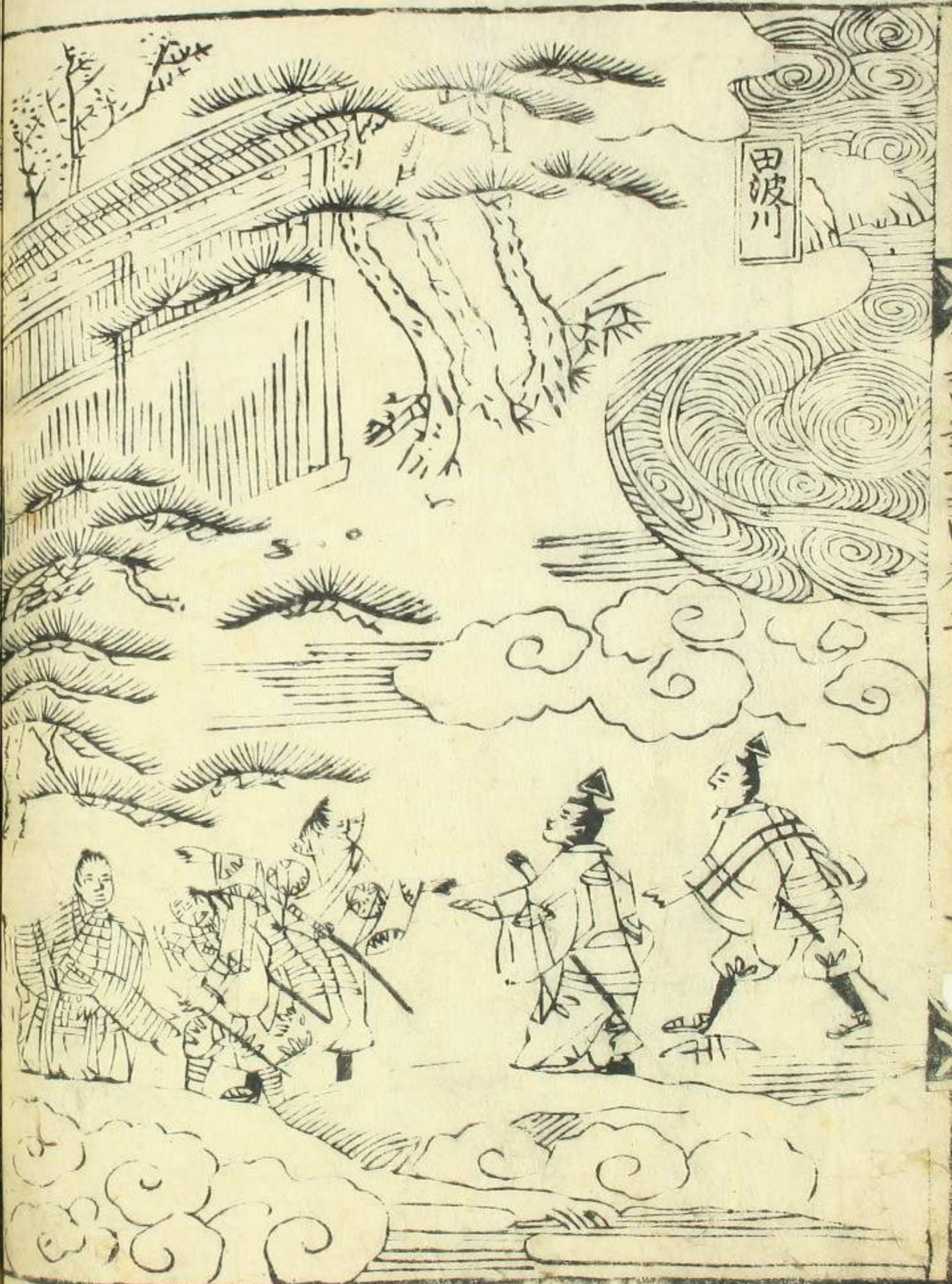
所を。身。逝。山。も。あ。る。の。時。其。後。の。心
り。し。乃。時。日。朗。ホ。う。は。り。く。我。死。を。死。骸。を
か。め。入。身。逝。山。を。く。れ。日。朗。の。こ。も。し。く。一。日
半。日。の。道。な。し。仰。了。任。入。し。道。す。く。に
四。五。日。を。の。ふ。志。う。も。し。う。が。う。志。う。し。入。国。を
中。に。存。生。の。間。さ。へ。道。を。も。り。し。ひ。と。ま。と
ひ。奉。り。し。清。ゆ。い。の。つ。を。の。こ。ま。び。身。逝。山。を
く。へ。し。と。中。上。野。へ。も。聖。人。の。つ。も。も。ろ。れ。も。可。慈。と
仰。の。こ。ま。此。清。遺。言。も。任。を。池。上。へ。送。申。荒。井。送。申
身。逝。山。を。く。り。ぬ。み。なり。清。遺。物。を。注。法。華

經一部十卷。日昭金色。乃立像の秋。迹日朗。
 終を畧す。十二日のたののこく。よ方便品と誦
 ド。大衆同音。是とよじ。入佛知見道。此所
 入滅をのく。さいこのく。うを。あけ
 奉つ。入棺十四日のいぬのこく。日朗。れをつと。身
 だびを祓のこく。だびの次第。前日朗。迹。日
 昭。へうろをのく。八人あり。れ秋尊を。靈
 鷲山。法華經を。たのく。又山のうし
 と。うも。あり。跋提河のから。沙羅林。ま
 ち。滅。入の。聖人。身。処。山。法

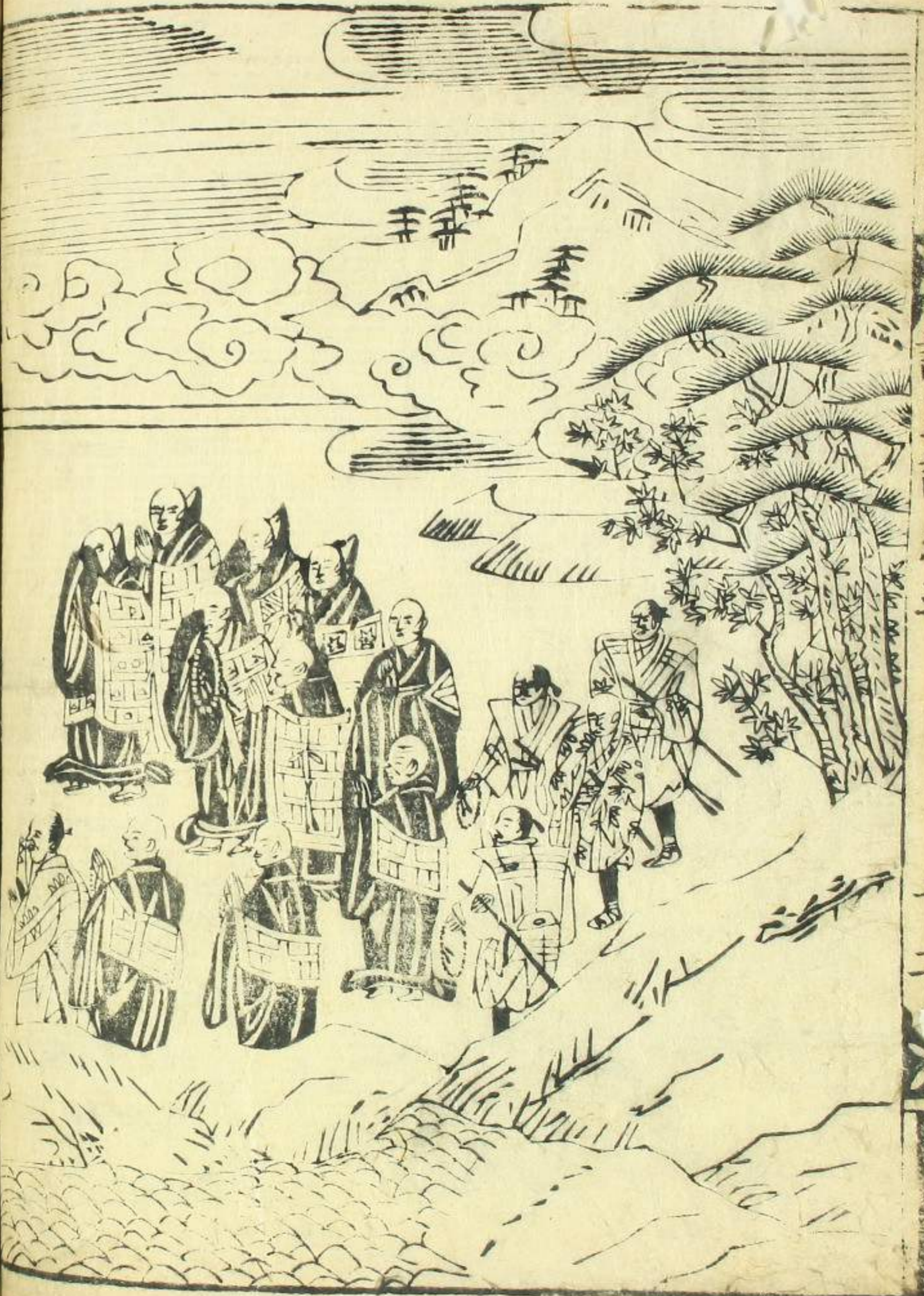
華經。よ。のひて。の山。う。う。あ。つて
 田波川のから。池上。のひ。う。入滅。の
 ろ。さ。れ。や。佛法。の。も。あ。さ。の。ひの
 ま。こ。な。く。と。う。説法。の。声。あ。の。ひ
 湧。か。子。ら。の。涙。と。ち。な。く。川。と。な。り。
 な。う。も。う。や。さ。き。だ。し。ま。や。う。れ。の。さ。げ。う。ら
 て。風。の。ぬ。ら。川。の。な。く。を。う。ハ。別。離。の。び。さ
 を。の。が。し。山。風。の。を。う。う。あ。の。う。つ。あ。し。の
 た。の。ひ。と。あ。さ。れ。あ。り

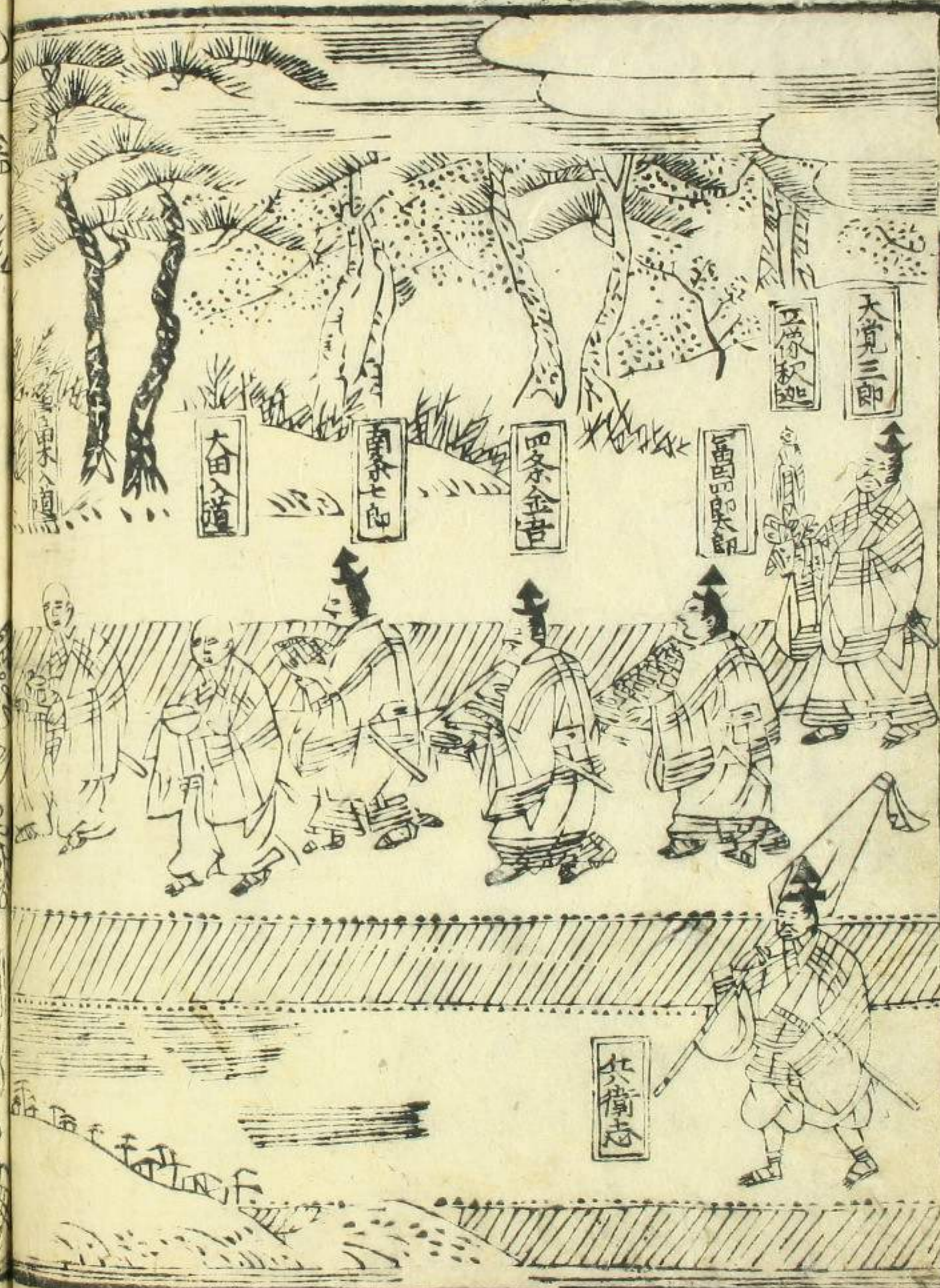
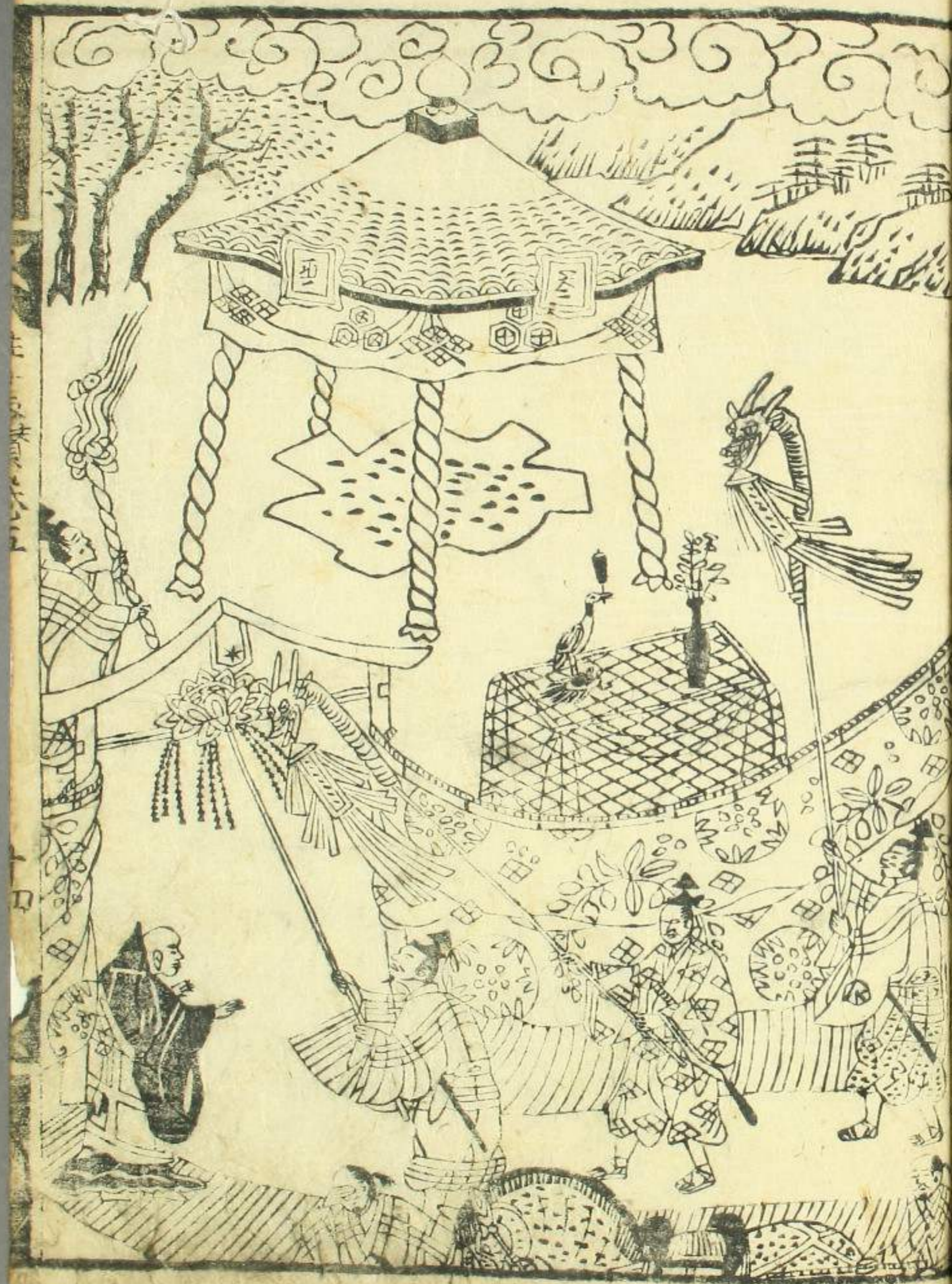


主書贊卷五



主書贊卷五





収取遺骨第三十一

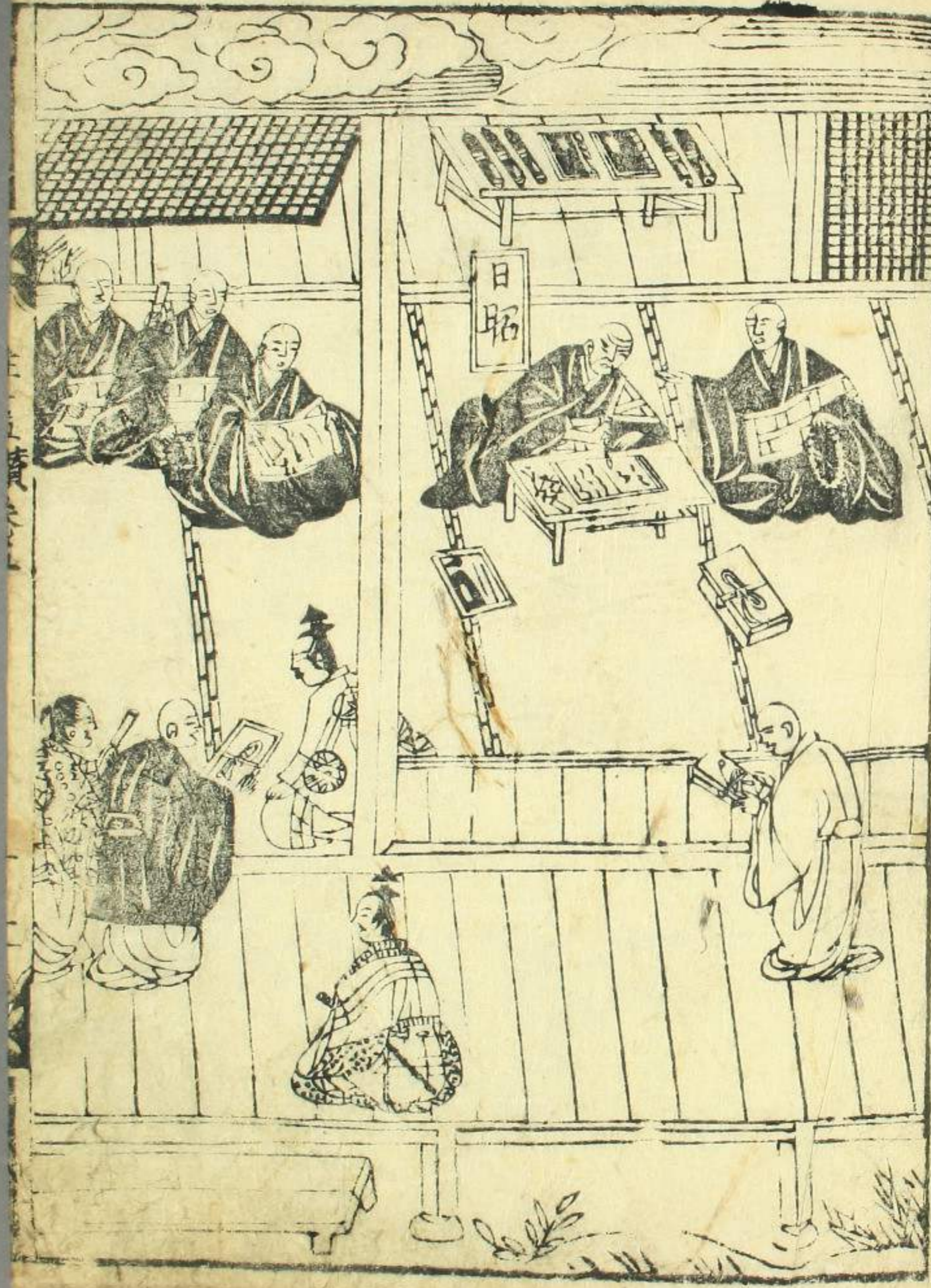
其後火をのつぐだひり。火さきしれりつぐ。遺骨をとおとめとる。釈迦如来の滅後、迦葉おはる者舍利をひろみ。遺命のこしく。身処山をめぐり。同まき女一日。池上へ出て。飯田まわり。女二日。湯本。女三日。車返。女四日。上野。南條七郎家。十五日。身処山。同二十九日。日法。影とまあひ。四十九日。堂へつぎ。百十日。廟をこく。骨をへ奉る。



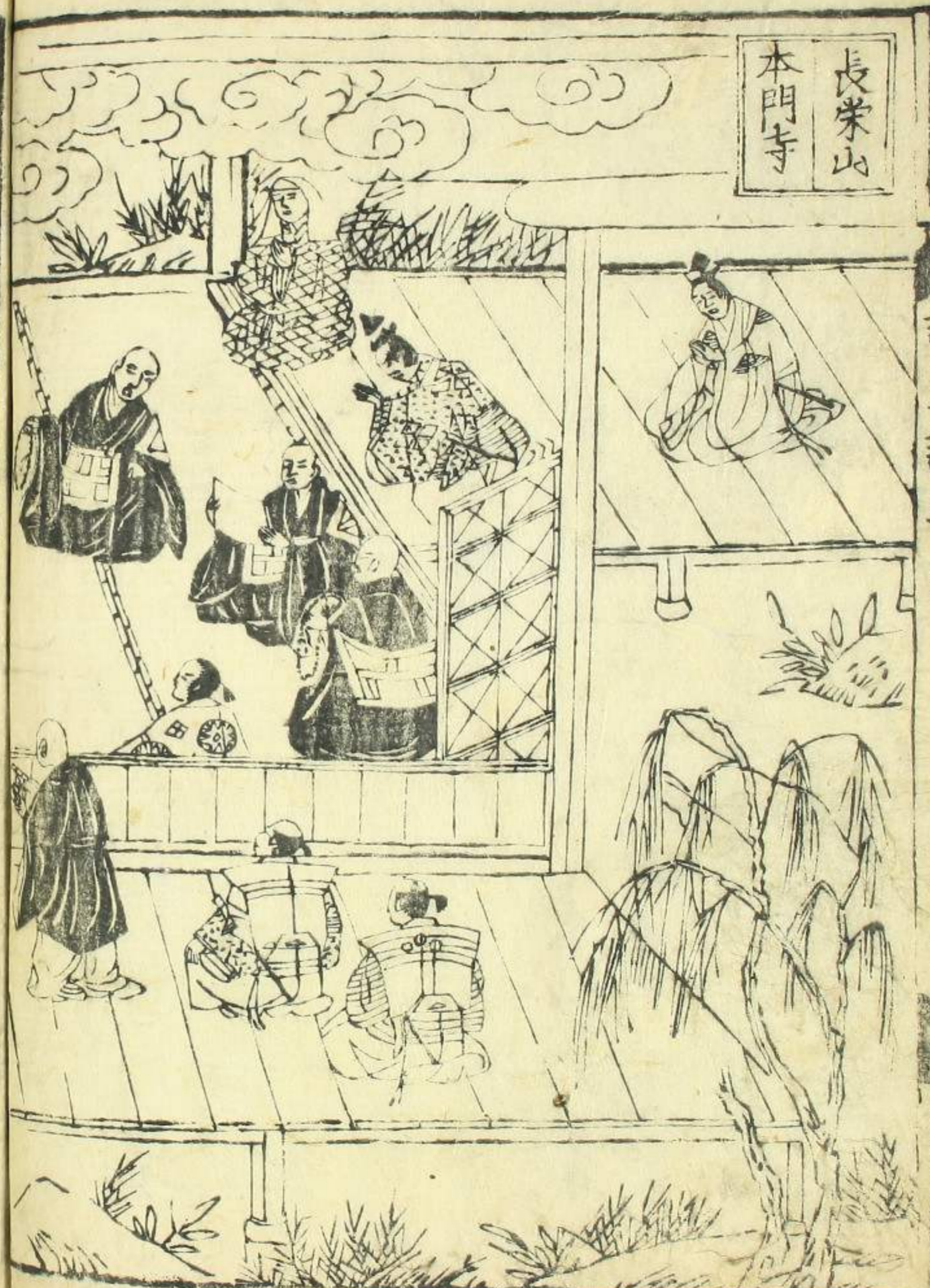


法書目録第三十二

弘安六年二月より。聖人の法書持多しを綴入
 軍中。悉其數をけりて。周忌持来るべし。
 目録に入べき由。是よりかき。依之僧俗をのり
 武蔵國池上長榮山本門寺。持来る。日昭筆
 取。合て百四十八通。定。此外まことの書をな
 ず。衆義とのり。むし。たや。き。目録。入
 へ。びの。六老僧同心の儀。定。同年
 十月十二日。各加判あり。或。後。の。才三年の
 目録。七百余條。才七年の目録。千余條。共り。す。



長栄山
本門寺



長栄山本門寺

歸命頂禮諸三寶
上行餘風扇來際

妙法注雨潤十方
法界衆生共成佛

寬永九年壬申三月
中野市右衛門刊行

